



OpenShift Container Platform 4.1

イメージ

OpenShift Container Platform 4.1 でのイメージおよびイメージストリームの作成および管理

OpenShift Container Platform 4.1 イメージ

OpenShift Container Platform 4.1 でのイメージおよびイメージストリームの作成および管理

法律上の通知

Copyright © 2020 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本書では、OpenShift Container Platform 4.1でイメージおよびイメージストリームを作成し、管理する方法を説明します。さらに、テンプレートの使用方法についても説明します。

目次

第1章 SAMPLES OPERATOR の設定	4
1.1. SAMPLES OPERATOR について	4
1.2. SAMPLES OPERATOR の設定パラメーター	4
1.3. SAMPLES OPERATOR 設定へのアクセス	7
第2章 コンテナ、イメージおよびイメージストリームについて	8
2.1. イメージ	8
2.2. コンテナ	8
2.3. イメージレジストリー	9
2.4. イメージリポジトリ	9
2.5. イメージタグ	9
2.6. イメージ ID	9
2.7. イメージストリームの使用	9
2.8. イメージストリームイメージ	11
2.9. イメージストリームトリガー	11
2.10. 追加リソース	11
第3章 イメージの作成	12
3.1. コンテナのベストプラクティスについて	12
3.2. イメージへのメタデータの組み込み	18
3.3. S2I イメージのテスト	19
第4章 イメージの管理	23
4.1. イメージの管理の概要	23
4.2. イメージのタグ付け	23
4.3. イメージプルポリシー	27
4.4. イメージプルシークレットの使用	27
第5章 イメージストリームの管理	30
5.1. イメージストリームの使用	30
5.2. イメージストリームの設定	31
5.3. イメージストリームイメージ	32
5.4. イメージストリームタグ	32
5.5. イメージストリーム変更トリガー	33
5.6. イメージストリームのマッピング	34
5.7. イメージストリームの使用	36
第6章 イメージ設定リソース	40
6.1. イメージコントローラー設定パラメーター	40
6.2. イメージ設定内容の設定	41
第7章 テンプレートの使用	44
7.1. テンプレートについて	44
7.2. テンプレートのアップロード	44
7.3. WEB コンソールを使用したアプリケーションの作成	44
7.4. CLI を使用してテンプレートからオブジェクトを作成する手順	45
7.5. アップロードしたテンプレートの変更	47
7.6. インスタントアプリおよびクイックスタートテンプレートの使用	48
7.7. テンプレートの作成	49
第8章 RUBY ON RAILS の使用	60
8.1. データベースの設定	60
8.2. アプリケーションの作成	61

8.3. アプリケーションの OPENSIFT CONTAINER PLATFORM へのデプロイ	64
第9章 イメージの使用	68
9.1. イメージの使用の概要	68
9.2. JENKINS イメージの設定	68
9.3. JENKINS エージェント	82

第1章 SAMPLES OPERATOR の設定

OpenShift namespace で動作する Samples Operator は、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) ベースの OpenShift Container Platform イメージストリームおよび OpenShift Container Platform テンプレートをインストールし、更新します。

前提条件

- OpenShift Container Platform クラスターをデプロイします。

1.1. SAMPLES OPERATOR について

Operator はインストール時に独自にデフォルト設定オブジェクトを作成し、その後にクイックスタートテンプレートを含む、サンプルのイメージストリームおよびテンプレートを作成します。

Samples Operator は、**registry.redhat.io** からのイメージストリームのインポートを容易にするために、インストールプログラムによってキャプチャーされたプルシークレットを OpenShift namespace にコピーし、シークレット **samples-registry-credentials** の名前を付けます。さらに、認証情報を必要とする他のレジストリーからのイメージストリームのインポートを容易にするには、クラスター管理者は、イメージのインポートを容易にするために必要な Docker **config.json** ファイルの内容を含む追加のシークレットを OpenShift namespace に作成できます。

Samples Operator 設定はクラスター全体で使用されるリソースであり、デプロイメントは **openshift-cluster-samples-operator** namespace 内に含まれます。

Samples Operator のイメージには、関連付けられた OpenShift Container Platform リリースのイメージストリームおよびテンプレートの定義が含まれます。各サンプルが作成または更新されると、Samples Operator には OpenShift Container Platform のバージョンを示すアノテーションが含まれます。Operator はこのアノテーションを使用して、各サンプルをリリースバージョンに一致させるようにします。このインベントリーの外にあるサンプルは省略されるサンプルであるために無視されます。バージョンのアノテーションが変更または削除されると、Operator が管理するサンプルに変更が加えられてもそれらの変更は自動的に元に戻されます。Jenkins イメージは実際にはインストールからのイメージペイロードの一部であり、イメージストリームに直接タグ付けされます。

Samples Operator 設定リソースには、削除時に以下を消去するファイナライザーが含まれます。

- Operator 管理のイメージストリーム
- Operator 管理のテンプレート
- Operator が生成する設定リソース
- クラスターステータスのリソース
- **samples-registry-credentials** シークレット

サンプルリソースの削除時に、Samples Operator はデフォルト設定を使用してリソースを再作成します。

1.2. SAMPLES OPERATOR の設定パラメーター

サンプルリソースは以下の設定フィールドを提供します。

パラメーター	説明
managementState	<p>Managed: Samples Operator は設定の指示に応じてサンプルを更新します。</p> <p>Unmanaged: Samples Operator は、その設定リソースオブジェクトおよび OpenShift namespace のイメージストリームまたはテンプレートへの更新を無視します。</p> <p>Removed: Samples Operator は OpenShift namespace の一連のManaged 状態のイメージストリームおよびテンプレートを除去します。これは、クラスター管理者によって作成される新規サンプルや、省略一覧にあるサンプルを無視します。除去が完了すると、Samples Operator は Unmanaged 状態にあるかのように機能し、サンプルリソース、イメージストリーム、またはテンプレートに対する監視イベントを無視します。</p> <p>注記</p> <p>削除または ManagementState の Removed への設定は、イメージストリームのインポートが進行中の場合には完了しません。進行中の状態が正常に、またはエラーを出して失敗すると、削除または除去が開始されます。</p> <p>シークレット、イメージストリーム、およびテンプレートの監視イベントは、削除または除去が開始されると無視されます。</p>
samplesRegistry	<p>イメージのインポート元からレジストリーを上書きします。</p> <p>注記</p> <p>RHEL コンテンツの作成または更新は、Samples Registry が明示的に設定 (空の文字列など) されていない場合やこれが registry.redhat.io に設定される場合にプルアクセスのシークレットが有効でないと開始されません。いずれの場合も、イメージのインポートは registry.redhat.io の外で機能し、これには認証情報が必要になります。</p> <p>RHEL コンテンツの作成または更新は、Samples Registry が空の文字列または registry.redhat.io 以外の値に上書きされる場合、プルシークレットの存在によって制御されることはありません。</p>
architectures	<p>アーキテクチャーのタイプを選択するためのプレースホルダー。現時点では、x86 のみがサポートされています。</p>
skippedImagestreams	<p>Samples Operator のインベントリーにあるものの、クラスター管理者が Operator に無視させるか、または管理させないようにするイメージストリーム。このパラメーターにイメージストリーム名の一覧を追加できます。例: ["httpd","perl"]</p>
skippedTemplates	<p>Samples Operator のインベントリーにあるものの、クラスター管理者が Operator に無視させるか、または管理させないようにするテンプレート。</p>

シークレット、イメージストリーム、およびテンプレート監視イベントは、初期サンプルリソースオブジェクトの作成前に追加することができ、Samples Operator はイベントを検出し、再度キューに入れます。

1.2.1. 設定の制限

Samples Operator が複数のアーキテクチャーをサポートする際に、アーキテクチャーの一覧は、**Managed** 状態の場合は変更できません。

アーキテクチャーの値を変更するために、クラスター管理者は以下を実行する必要があります。

- **Management State** に **Removed** のマークを付け、変更を保存します。
- その後の変更では、アーキテクチャーを編集し、**Management State** を **Managed** に戻します。

Samples Operator は **Removed** 状態の場合に依然としてシークレットを処理します。**Removed** に切り換える前にシークレットを作成でき、**Managed** に切り換える前の **Removed** 状態、または **Managed** 状態に切り換えた後にも作成できます (**Managed** に切り替えた後にシークレットを作成する場合、シークレットイベントが処理されるまでサンプルの作成に遅延が生じます)。これは、レジストリーの変更を容易にするために実行されます。ここでは、クリーンな状態にするために、切り替え前にすべてのサンプルを削除することを選択できます (切り替え前の削除は必須ではありません)。

1.2.2. 条件

サンプルリソースには以下の条件とそのステータスが適用されます。

条件	説明
SamplesExists	サンプルが OpenShift namespace に作成されていることを示します。
ImageChangesInProgress	<p>True イメージストリームが作成または更新される場合に、タグ仕様の生成およびタグステータスの生成のすべてが一致する訳ではありません。</p> <p>False すべての生成が一致するか、または修復不可能なエラーがインポート時に発生した場合、最後に表示されるエラーは message フィールドに置かれます。保留中のイメージストリームの一覧は reason フィールドに置かれます。</p>
ImportCredentialsExist	samples-registry-credentials シークレットが OpenShift namespace にコピーされます。
ConfigurationValid	前述の制限された変更のいずれかが送信されるかどうかに応じて True または false になります。
RemovePending	Management State: Removed 設定が保留中であるが、進行中のイメージストリームの完了を待機していることを示すインジケーター。
ImportImageErrorsExist	<p>イメージストリームのタグのいずれかについて、イメージストリームでイメージインポートフェーズにエラーがあったことを示すインジケーター。</p> <p>True エラーが発生した場合。エラーのあるイメージストリームの一覧は reason フィールドに置かれます。報告されるそれぞれのエラーの詳細は message フィールドに置かれます。</p>

条件	説明
MigrationInProgress	True バージョンが現在のサンプルセットのインストールに使用した Samples Operator バージョンと異なることを Samples Operator が検知する場合。

1.3. SAMPLES OPERATOR 設定へのアクセス

Samples Operator は、提供されるパラメーターでファイルを編集して設定できます。

前提条件

- **oc** として知られる OpenShift コマンドラインインターフェース (CLI) のインストール。

手順

- Samples Operator 設定にアクセスします。

```
$ oc get configs.samples.operator.openshift.io/cluster -o yaml
```

Samples Operator 設定は以下の例のようになります。

```
apiVersion: samples.operator.openshift.io/v1
kind: Config
projectName: cluster-samples-operator
...
```

第2章 コンテナ、イメージおよびイメージストリームについて

コンテナ、イメージ、およびイメージストリームは、コンテナ化されたソフトウェアを作成し、管理する際に理解しておくべき重要な概念です。イメージは、コンテナがコンテナイメージの実行中のインスタンスである場合に、実行の準備ができている一連のソフトウェアを保持します。イメージストリームは、同一の基本的なイメージの異なるバージョンを保存する1つの方法です。それらの異なるバージョンは、同じイメージ名の異なるタグによって表されます。

2.1. イメージ

OpenShift Container Platform のコンテナは OCI または Docker 形式のコンテナの **イメージ** をベースにしています。イメージは、単一コンテナを実行するためのすべての要件、およびそのニーズおよび機能を記述するメタデータを含むバイナリです。

これはパッケージ化テクノロジーとして考えることができます。コンテナには、作成時にコンテナに追加のアクセスを付与しない限り、イメージで定義されるリソースにのみアクセスできます。同じイメージを複数のホストにまたがって複数のコンテナにデプロイし、それらの間で負荷を分散することにより、OpenShift Container Platform はイメージにパッケージ化されたサービスの冗長性および水平的なスケーリングを提供できます。

イメージをビルドするために `podman` または `docker` CLI を直接使用することはできますが、OpenShift Container Platform は、コードまたは設定を既存イメージに追加して新規イメージの作成を支援するビルダーイメージも提供します。

アプリケーションは一定期間をかけて開発されるため、単一のイメージ名が同じイメージの数多くの異なるバージョンを参照する場合があります。異なるイメージはそれぞれ、そのハッシュ (長い 16 進数、例: `fd44297e2ddb050ec4f...`) で一意に参照され、通常は 12 文字 (例: `fd44297e2ddb`) に短縮されます。

2.2. コンテナ

OpenShift Container Platform アプリケーションの基本的な単位は **コンテナ** と呼ばれています。[Linux コンテナテクノロジー](#) は、指定されたリソースのみとの対話に制限されるように、実行中のプロセスを分離する軽量なメカニズムです。このコンテナという用語は、コンテナイメージの実行中または一時停止している特定のインスタンスとして定義されています。

数多くのアプリケーションインスタンスは、相互のプロセス、ファイル、ネットワークなどを可視化せずに単一ホストのコンテナで実行される可能性があります。通常、コンテナは任意のワークロードに使用されますが、各コンテナは Web サーバーまたはデータベースなどの (通常は「マイクロサービス」と呼ばれることの多い) 単一サービスを提供します。

Linux カーネルは数年にわたりコンテナテクノロジーの各種機能を統合してきました。Docker プロジェクトはホスト上の Linux コンテナの便利な管理インターフェースを開発しました。さらに最近では、[Open Container Initiative](#) により、コンテナ形式およびコンテナランタイムのオープン標準が策定されています。OpenShift Container Platform および Kubernetes は複数ホストのインストール間で OCI および Docker 形式のコンテナのオーケストレーションを実行する機能を追加しています。

OpenShift Container Platform を使用する際にコンテナランタイムと直接対話することはありませんが、それらの OpenShift Container Platform における役割やコンテナ内でのアプリケーションの機能を理解する上で、それらの機能および用語を理解しておくことは重要です。

`podman` などのツールは、コンテナを直接実行し、管理するための `docker` コマンドラインツールを置き換えるために使用できます。`podman` を使用すると、OpenShift Container Platform と切り離してコンテナの実験を行うことができます。

2.3. イメージレジストリー

イメージレジストリーは、コンテナイメージを保管し、提供するコンテナサーバーです。以下は例になります。

```
registry.redhat.io
```

レジストリーには、1つ以上のタグ付けされたイメージを持つ1つ以上のイメージリポジトリーのコレクションが含まれます。Red Hat は、サブスクリプションをお持ちのお客様に対して **registry.redhat.io** でレジストリーを提供しています。また、OpenShift Container Platform はカスタムコンテナイメージを管理するための独自の内部レジストリーも提供しています。

2.4. イメージリポジトリー

イメージリポジトリーは、関連するコンテナイメージおよびそれらを特定するタグのコレクションです。たとえば、OpenShift Jenkins イメージはリポジトリーにあります。

```
docker.io/openshift/jenkins-2-centos7
```

2.5. イメージタグ

イメージタグは、イメージストリーム内の他のイメージから特定のイメージを識別するリポジトリーのコンテナイメージに適用されるラベルです。通常、タグはある種のバージョン番号を表します。たとえば、ここでは `v3.11.59-2` がタグになります。

```
registry.access.redhat.com/openshift3/jenkins-2-rhel7:v3.11.59-2
```

イメージにタグを追加することができます。たとえば、イメージには `:v3.11.59-2` および `:latest` というタグが割り当てられる可能性があります。

OpenShift Container Platform は **docker tag** コマンドに似ている **oc tag** コマンドを提供しますが、イメージ上で直接動作するのではなくイメージストリーム上で動作します。

2.6. イメージ ID

イメージ ID は、イメージをプルするために使用できる SHA (Secure Hash Algorithm) コードです。SHA イメージ ID は変更できません。特定の SHA ID は同一のコンテナイメージコンテンツを常に参照します。以下は例になります。

```
docker.io/openshift/jenkins-2-centos7@sha256:ab312bda324
```

2.7. イメージストリームの使用

イメージストリームおよびその関連付けられたタグは、OpenShift Container Platform 内でコンテナイメージを参照するための抽象化を提供します。イメージストリームとそのタグを使用して、利用可能なイメージを確認し、リポジトリーのイメージが変更される場合でも必要な特定のイメージを使用していることを確認できます。

イメージストリームには実際のイメージデータは含まれませんが、イメージリポジトリーと同様に、関連するイメージの単一の仮想ビューを提示します。

ビルドおよびデプロイメントは、イメージストリームで新規イメージの追加時の通知の有無を監視するように設定し、ビルドまたはデプロイメントをそれぞれ実行してこれに対応するように設定できます。

たとえば、デプロイメントで特定のイメージを使用していて、そのイメージの新規バージョンが作成される場合、デプロイメントを、そのイメージの新規バージョンを選択できるように自動的に実行します。

ただし、デプロイメントまたはビルドで使用されるイメージストリームタグが更新されない場合は、コンテナイメージレジストリーのコンテナイメージが更新されても、ビルドまたはデプロイメントは以前のおそらくは既知の正常なイメージをそのまま使用します。

ソースイメージは以下のいずれかに保存できます。

- OpenShift Container Platform の統合レジストリー
- **registry.redhat.io** または **hub.docker.com** などの外部レジストリー
- OpenShift Container Platform クラスターの他のイメージストリーム

(ビルドまたはデプロイメント設定などの) イメージストリームタグを参照するオブジェクトを定義する場合は、Docker リポジトリではなく、イメージストリームタグを参照します。アプリケーションのビルドまたはデプロイ時に、OpenShift Container Platform はイメージストリームタグを使用して Docker リポジトリにクエリーを送信し、イメージの関連付けられた ID を特定し、正確なイメージを使用します。

イメージストリームメタデータは他のクラスター情報と共に etcd インスタンスに保存されます。

イメージストリームの使用には、いくつかの大きな利点があります。

- コマンドラインを使用して再プッシュすることなく、タグ付けや、タグのロールバック、およびイメージの迅速な処理を実行できます。
- 新規イメージがレジストリーにプッシュされると、ビルドおよびデプロイメントをトリガーできます。また、OpenShift Container Platform には他のリソースの汎用トリガーがあります (Kubernetes オブジェクトなど)。
- 定期的な再インポートを実行するためにタグにマークを付けることができます。ソースイメージが変更された場合、その変更は認識され、イメージストリームに反映されます。これにより、ビルドまたはデプロイメント設定のいずれかに応じて、ビルドおよび/またはデプロイメントフローがトリガーされます。
- 詳細なアクセス制御を使用してイメージを共有し、チーム間でイメージを迅速に分散できます。
- ソースイメージが変更されても、イメージストリームタグはイメージの既知の正常なバージョンを参照したままになり、アプリケーションに予期しない障害が発生しないようにします。
- イメージストリームオブジェクトのパーミッションを使用して、イメージを表示し、使用できるユーザーについてのセキュリティ設定を行うことができます。
- クラスターレベルでイメージを読み込んだり、一覧表示するパーミッションのないユーザーでも、イメージストリームを使用してプロジェクトでタグ付けされたイメージを取得できます。

2.7.1. イメージストリームタグ

イメージストリームタグは、イメージストリームのイメージに対する名前付きポインターです。イメージストリームタグはコンテナイメージタグに似ています。

2.8. イメージストリームイメージ

イメージストリームイメージは、これがタグ付けされている特定のイメージストリームから特定のコンテナイメージを取得できるようにします。イメージストリームイメージは、特定のイメージの SHA ID についてのメタデータをプルする API リソースオブジェクトです。

2.9. イメージストリームトリガー

イメージストリームトリガーは、イメージストリームタグの変更時に特定のアクションを生じさせます。たとえば、インポートにより、タグの値が変更され、これによりデプロイメント、ビルドまたはそれらをリッスンする他のリソースがある場合にトリガーが実行されます。

2.10. 追加リソース

- イメージストリームの使用方法についての詳細は、「[イメージストリームの管理](#)」を参照してください。

第3章 イメージの作成

使用可能な事前にビルドされたイメージを使用して独自のコンテナイメージを作成する方法について確認します。このプロセスには、イメージの作成、イメージのメタデータの定義、イメージのテストおよびカスタムビルダーワークフローを使用した OpenShift Container Platform で使用できるイメージの作成のベストプラクティスを理解することが含まれます。イメージを作成した後は、これを内部レジストリーにプッシュできます。

3.1. コンテナのベストプラクティスについて

OpenShift Container Platform で実行するコンテナイメージを作成する場合には、イメージの作成者は、イメージの使いやすさの点で数多くのベストプラクティスを考慮する必要があります。イメージは変更不可で、そのままの状態で使用されることが意図されているため、以下のガイドラインは、イメージを使用しやすく、OpenShift Container Platform で簡単に使用できるようにするのに役立ちます。

3.1.1. コンテナイメージの一般的なガイドライン

以下のガイドラインは、イメージが OpenShift Container Platform で使用されるかどうかにかかわらず、コンテナイメージの作成時に一般的に適用されます。

イメージの再利用

可能な場合は、**FROM** ステートメントを使用し、適切なアップストリームイメージをベースとしてイメージを設定することを推奨します。これにより、依存関係を直接更新する必要なく、イメージが更新時にアップストリームイメージからセキュリティー修正を簡単に取得できるようになります。

さらに、**FROM** 命令 (例: `rhel:rhel7`) のタグを使用して、お使いのイメージがどのバージョンのイメージをベースとしているかを明確にします。アップストリームイメージの **latest** バージョンを使用すると互換性に影響のある変更が組み込まれる可能性があるため、**latest** 以外のタグを使用することができます。

タグ内の互換性の維持

独自のイメージにタグを付ける場合には、タグ内で後方互換性が維持されるようにすることを推奨します。たとえば、`foo` という名前のイメージがあり、現時点でバージョン 1.0 が含まれている場合には、タグに `foo:v1` を指定します。イメージの更新時には、元のイメージとの互換性がある限り、新しいイメージに `foo:v1` のタグを付けることができ、このタグのダウンストリームのコンシューマーは、互換性に関する影響を被ることなく更新を取得できるようになります。

互換性のない更新を後にリリースした場合には、`foo:v2` などの新しいタグに切り替える必要があります。これにより、ダウンストリームのコンシューマーはいつでも新しいバージョンに移行できますが、意図せずにこの互換性のない新規イメージによる影響を受けることはありません。`foo:latest` を使用するダウンストリームコンシューマーには、互換性のない変更が導入されるリスクがあります。

複数プロセスの回避

データベースや **SSHD** など複数のサービスを1つのコンテナ内で起動しないようにしてください。コンテナは軽量で、複数のプロセスをオーケストレーションするために簡単にリンクできるので、複数プロセスの実行は不要です。OpenShift Container Platform では、関連のあるイメージを1つの Pod にグループ化して、簡単に共存させ、共同管理することができます。

このように共存させることで、コンテナはネットワークの namespace とストレージを通信用に共有できるようになります。また、イメージの更新頻度が低く、個別に更新されるので、更新による中断の可能性が低くなります。シグナル処理フローは、複数の起動したプロセスへのルーティングシグナルを管理する必要がないので、単一プロセスによって明確になります。

ラッパースクリプトでの `exec` の使用

多くのイメージはラッパースクリプトを使用して、実行されるソフトウェアのプロセスを開始する前に

いくつかの設定を行います。イメージがこのようなスクリプトを使用する場合、そのスクリプトは、スクリプトのプロセスがソフトウェアによって置き換えられるように **exec** を使用するはずですが、**exec** を使用しない場合、コンテナランタイムによって送信されるシグナルが、ソフトウェアのプロセスではなくラッパースクリプトに送られます。これは、以下で説明するように望ましいアクションではありません。

たとえば、一部のサーバーのプロセスを開始するラッパースクリプトがあるとします。コンテナを起動する (たとえば、**podman run -i** を使用する) と、それによりラッパースクリプトが実行され、次にプロセスが開始されます。ここで、**CTRL+C** でコンテナを強制終了する必要があるとします。ラッパースクリプトが **exec** を使用してサーバープロセスを開始した場合、**podman** は SIGINT をサーバープロセスに送信し、すべてが予想通りに機能します。ラッパースクリプトで **exec** を使用しなかった場合、**podman** はラッパースクリプトのプロセスに SIGINT を送信し、何も生じなかったかのようにプロセスは実行し続けます。

また、コンテナ内で実行すると、プロセスは PID 1 として実行される点に留意してください。つまり、主なプロセスが中断された場合には、コンテナ全体が停止され、PID 1 プロセスから起動した子プロセスが終了します。

その他の影響については、[Docker and the PID 1 zombie reaping problem](#) のブログ記事を参照してください。また、PID 1 および **init** システムの詳細については、[Demystifying the init system \(PID 1\)](#) のブログ記事も参照してください。

一時ファイルの消去

ビルドプロセスで作成される一時ファイルはすべて削除する必要があります。これには、**ADD** コマンドで追加したファイルも含まれます。たとえば、**yum install** の操作を実行してから、**yum clean** コマンドを実行することを強く推奨します。

yum キャッシュがイメージレイヤーに残らないように、以下のように **RUN** ステートメントを作成します。

```
RUN yum -y install mypackage && yum -y install myotherpackage && yum clean all -y
```

以下のように記述した場合には注意してください。

```
RUN yum -y install mypackage  
RUN yum -y install myotherpackage && yum clean all -y
```

上記のように記述すると、最初の **yum** 呼び出しにより、対象のレイヤーに追加のファイルが残り、**yum clean** 操作を後に実行してもこれらのファイルは削除できません。これらの追加ファイルは最終イメージでは確認できませんが、下位レイヤーには存在します。

現在のコンテナビルドプロセスでは、前のレイヤーで何かが削除された場合でも、後のレイヤーでコマンドを実行してイメージが使用する容量を縮小できません。ただし、これについては今後変更される可能性はあります。後のレイヤーでファイルが表示されていなくても **rm** コマンドを実行したとしても、ダウンロードするイメージの全体のサイズを縮小することになりません。そのため、**yum clean** の場合のように、可能な場合は後にレイヤーに書き込まれないように、ファイルの作成に使用したのと同じコマンドでファイルを削除することが最も適切と言えます。

また、単一の **RUN** ステートメントで複数のコマンドを実行すると、イメージのレイヤー数が減り、ダウンロードと実行時間が短縮されます。

正しい順序での命令の指定

コンテナビルダーは **Dockerfile** を読み取り、トップダウンで命令を実行します。命令が正常に実行されると、同じイメージが次回ビルドされるときや、別のイメージがビルドされる時に再利用することができるレイヤーが作成されます。**Dockerfile** の上部にほとんど変更されない命令を配置することは非

常に重要です。こうすることで、上位レイヤーで加えられた変更によってキャッシュが無効にならないので、同じイメージの次のビルドをすばやく実行できます。

たとえば、反復するファイルをインストールするための **ADD** コマンドと、パッケージを **yum install** する **RUN** コマンドが含まれる **Dockerfile** で作業を行う場合には、**ADD** コマンドを最後に配置することが最善の方法です。

```
FROM foo
RUN yum -y install mypackage && yum clean all -y
ADD myfile /test/myfile
```

これにより、**myfile** を編集して **podman build** または **docker build** を返すたびに、システムは **yum** コマンドのキャッシュされたレイヤーを再利用し、**ADD** 操作に対してのみ新規レイヤーを生成します。

代わりに **Dockerfile** を以下のように作成した場合:

```
FROM foo
ADD myfile /test/myfile
RUN yum -y install mypackage && yum clean all -y
```

myfile を変更して、**podman build** または **docker build** を再実行するたびに、**ADD** 操作は **RUN** レイヤーのキャッシュを無効にするので、**yum** 操作も再実行する必要があります。

重要なポートのマーク付け

EXPOSE 命令は、ホストシステムで利用できるコンテナおよび他のコンテナにポートを作成します。ポートを **podman run** の起動で公開されるように指定できますが、**Dockerfile** で EXPOSE 命令を使用すると、ソフトウェアが実行する必要のあるポートを明示的に宣言することで、人間とソフトウェアの両方がイメージをより簡単に使用できるようになります。

- 公開されるポートは、イメージから作成されるコンテナに関連付けられて **podman ps** の下に表示されます。
- 公開されるポートは、**podman inspect** によって返されるイメージのメタデータにも表示されます。
- 公開されるポートは、1つのコンテナを別のコンテナにリンクする際にリンクされます。

環境変数の設定

ENV 命令で環境変数を設定することが適切です。一例として、プロジェクトのバージョンを設定するなどが挙げられます。バージョンを設定することで、**Dockerfile** を確認せずにバージョンを簡単に見つけ出すことができます。別の例としては、**JAVA_HOME** など、別のプロセスで使用可能なシステムでパスを公開する場合などです。

デフォルトのパスワードの回避

デフォルトのパスワードは設定しないことが最善の策です。イメージを拡張して、デフォルトのパスワードを削除または変更するのを忘れることが多くあります。これは、実稼働環境で使用するユーザーに誰でも知っているパスワードが割り当てられると、セキュリティの問題に発展する可能性があります。パスワードは、環境変数を使用して設定できるようにする必要があります。

デフォルトのパスワードを設定することにした場合には、コンテナの起動時に適切な警告メッセージが表示されるようにしてください。メッセージはデフォルトパスワードの値をユーザーに通知し、環境変数の設定など、パスワードの変更方法を説明するものである必要があります。

SSHD の回避

イメージで **sshd** を実行しないようにしてください。ローカルホストで実行中のコンテナにアクセス

するには、**podman exec** または **docker exec** コマンドを使用できます。または、**oc exec** コマンドまたは **oc rsh** コマンドを使用して、OpenShift Container Platform クラスターで実行中のコンテナにアクセスできます。イメージで **sshd** をインストールし、実行すると、攻撃の経路が増え、セキュリティー修正が必要になります。

永続データ向けのボリュームの使用

イメージは、永続データ用に**ボリューム**を使用する必要があります。こうすることで、OpenShift Container Platform により、コンテナを実行するノードにネットワークストレージがマウントされ、コンテナが新しいノードに移動した場合に、ストレージはそのノードに再度割り当てられます。永続ストレージのすべての要件に対応するようにボリュームを使用することで、コンテナが再起動されたり、移動されたりしても、コンテンツは保存されます。イメージがコンテナ内の任意の場所にデータを書き込む場合には、コンテンツは保存されない可能性があります。

コンテナが破棄された後も保存する必要のあるデータはすべて、ボリュームに書き込む必要があります。コンテナエンジンはコンテナの **readonly** フラグをサポートしており、このフラグを使用して、コンテナの一時ストレージにデータが決して記述されないようにすることができます。イメージをこの機能に基づいて設計すると、この機能を後に利用することがより簡単になります。

さらに、**Dockerfile** でボリュームを明示的に定義すると、イメージの利用者がイメージの実行時に定義する必要のあるボリュームがどれかを簡単に理解できるようになります。

OpenShift Container Platform でのボリュームの使用方法についての詳細は、[Kubernetes ドキュメント](#)を参照してください。



注記

永続ボリュームでも、イメージの各インスタンスには独自のボリュームがあり、ファイルシステムはインスタンス間で共有されません。つまり、ボリュームを使用してクラスターの状態を共有できません。

追加リソース

- Docker ドキュメント - [Best practices for writing Dockerfiles](#)
- Project Atomic ドキュメント - [Guidance for Container Image Authors](#)

3.1.2. OpenShift Container Platform 固有のガイドライン

以下は、OpenShift Container Platform で使用するためのコンテナイメージの作成時に適用されるガイドラインです。

Source-To-Image (S2I) 向けのイメージの有効化

開発者が提供した Ruby コードを実行するように設計された Ruby イメージなど、サードパーティー提供のアプリケーションコードを実行することが目的のイメージの場合には、イメージを [Source-to-Image \(S2I\)](#) ビルドツールと連携できるようにすることができます。S2I は、インプットとして、アプリケーションのソースコードを受け入れるイメージを簡単に記述でき、アSEMBルされたアプリケーションをアウトプットとして実行する新規イメージを簡単に生成することができるフレームワークです。

たとえば、この [Python イメージ](#) は S2I スクリプトを定義して、Python アプリケーションのさまざまなバージョンをビルドします。

任意のユーザー ID のサポート

デフォルトでは OpenShift Container Platform は、任意に割り当てられたユーザー ID を使用してコンテナを実行します。こうすることで、コンテナエンジンの脆弱性が原因でコンテナから出ていくプロセスに対して追加のセキュリティーを設定でき、ホストノードでパーミッションのエスカレーションが可能になります。

イメージが任意ユーザーとしての実行をサポートできるように、イメージ内のプロセスで記述される可能性のあるディレクトリーやファイルは、root グループが所有し、このグループに対して読み取り/書き込みの権限を割り当てる必要があります。実行予定のファイルには、グループの実行権限も必要です。

以下を Dockerfile に追加すると、root グループのユーザーがビルドされたイメージでアクセスできるように、ディレクトリーおよびファイルのパーミッションが設定されます。

```
RUN chgrp -R 0 /some/directory && \  
    chmod -R g=u /some/directory
```

コンテナユーザーは常に root グループのメンバーであるため、コンテナユーザーはこれらのファイルに対する読み取り、書き込みが可能です。



警告

コンテナの慎重に扱うべき分野のディレクトリーおよびファイルパーミッションを変更する場合には注意が必要です（通常のシステムの扱い方と同様です）。

`/etc/passwd` などの慎重に扱うべき分野に適用されると、意図しないユーザーによるこのようなファイルの変更が可能となり、コンテナやホストにセキュリティ上のリスクが生じる可能性があります。CRI-O は、ランダムユーザー ID のコンテナの `/etc/passwd` への挿入をサポートするため、そのパーミッションを変更する必要はありません。

さらに、コンテナで実行中のプロセスは、特権のあるユーザーとして実行されていないので、特権のあるポート (1024 未満のポート) をリッスンできません。



重要

S2I イメージに、ユーザーを数値で指定した **USER** 宣言が含まれない場合には、デフォルトで、ビルドが失敗するようになっていました。名前が指定されたユーザーや root (0) ユーザーを使用するイメージを OpenShift Container Platform でビルドできるようにするには、プロジェクトのビルダーサービスアカウント (`system:serviceaccount:<your-project>:builder`) を **特権付き SCC** (security context constraint) に追加できます。または、すべてのイメージをどのユーザーでも実行できるようにできます。

イメージ間通信でのサービスの使用

データの保存や取得のためにデータベースイメージにアクセスする必要のある Web フロントエンドイメージなど、別のイメージが提供するサービスとイメージが通信する場合には、イメージは OpenShift Container Platform サービスを使用する必要があります。サービスは、コンテナが停止、開始、または移動しても変更されない静的アクセスエンドポイントを提供します。さらに、サービスにより、要求が負荷分散されます。

共通のライブラリーの提供

サードパーティーが提供するアプリケーションコードの実行を目的とするイメージの場合は、プラットフォーム用として共通に使用されるライブラリーをイメージに含めるようにしてください。とくに、プラットフォームで使用する共通のデータベース用のデータベースドライバーを設定してください。たとえば、Java フレームワークイメージを作成する場合に、MySQL や PostgreSQL には JDBC ドライ

バーを設定します。このように設定することで、アプリケーションのアセンブリー時に共通の依存関係をダウンロードする必要がなくなり、アプリケーションイメージのビルドがスピードアップします。また、すべての依存関係の要件を満たすためのアプリケーション開発者の作業が簡素化されます。

設定での環境変数の使用

イメージのユーザーは、ダウストリームイメージをイメージに基づいて作成しなくても、イメージの設定が行えるようにしてください。つまり、ランタイム設定は環境変数を使用して処理される必要があります。単純な設定の場合、実行中のプロセスは環境変数を直接使用できます。より複雑な設定や、これをサポートしないランタイムの場合、起動時に処理されるテンプレート設定ファイルを定義してランタイムを設定します。このプロセス時に、環境変数を使用して渡される値は設定ファイルで置き換えることも、この値を使用して、設定ファイルに指定するオプションを決定することもできます。

環境変数を使用して、コンテナに証明書やキーなどのシークレットを渡すこともでき、これは推奨されています。環境変数を使用することで、シークレット値がイメージにコミットされたり、コンテナイメージレジストリーに漏洩されることはありません。

環境変数を指定することで、イメージの利用者は、イメージ上に新しいレイヤーを作成することなく、データベースの設定、パスワード、パフォーマンスチューニングなどの動作をカスタマイズできます。Podの定義時に環境変数の値を定義するだけで、イメージの再ビルドなしに設定を変更できます。

非常に複雑なシナリオの場合、ランタイム時にコンテナにマウントされるボリュームを使用して設定を指定することも可能です。ただし、この方法を使用する場合には、必要なボリュームや設定が存在しない場合に明確なエラーメッセージが起動時に表示されるように、イメージが設定されている必要があります。

サービスエンドポイントの情報を渡す環境変数としてデータソースなどの設定を定義する必要がある点で、これはイメージ間の通信でのサービスの使用についてのトピックと関連しています。これにより、アプリケーションは、アプリケーションイメージを変更せずに、OpenShift Container Platform 環境に定義されているデータソースサービスを動的に使用できます。

さらに、コンテナの **cgroups** 設定を確認して、調整を行う必要があります。これにより、イメージは利用可能なメモリー、CPU、他のリソースに合わせてチューニングが可能になります。たとえば、Java ベースのイメージは、制限を超えず、メモリー不足のエラーが表示されないように、**cgroup** の最大メモリーパラメーターを基にヒープをチューニングする必要があります。

コンテナの **cgroup** クォータを管理する方法については、以下の資料を参照してください。

- ブログ記事 - [Resource management in Docker](#)
- Docker ドキュメント - [Runtime metrics](#)
- ブログ記事 - [Memory inside Linux containers](#)

イメージのメタデータ設定

イメージのメタデータを定義することで、OpenShift Container Platform によるコンテナイメージの使用が改善され、開発者が OpenShift Container Platform でイメージを使用しやすくなります。たとえば、メタデータを追加して、イメージに関する役立つ情報を提供したり、必要とされる可能性のある他のイメージを提案したりできます。

クラスタリング

イメージの複数のインスタンスを実行するとはどういうことかを十分に理解しておく必要があります。最も単純な例では、サービスの負荷分散機能は、イメージのすべてのインスタンスにトラフィックをルーティングします。ただし、セッションの複製などで、リーダーの選択やフェイルオーバーの状態を実行するには、多くのフレームワークが情報を共有する必要があります。

OpenShift Container Platform での実行時に、インスタンスでこのような通信を実現する方法を検討します。Pod 同士は直接通信できますが、Pod が起動、停止、移動するたびに IP アドレスが変更されます。そのため、クラスタリングスキームを動的にしておくことが重要です。

ロギング

すべてのロギングを標準出力に送信することが推奨されます。OpenShift Container Platform はコンテナから標準出力を収集し、表示が可能な中央ロギングサービスに送信します。ログコンテンツを分離する必要がある場合には、出力のプレフィックスに適切なキーワードを指定して、メッセージをフィルタリングできるようにしてください。

お使いのイメージがファイルにロギングをする場合には、手動で実行中のコンテナに入り、ログファイルを取得または表示する必要があります。

Liveness および Readiness プローブ

イメージで使用可能な liveness および readiness プローブの例をまとめます。これらのプローブにより、処理の準備ができるまでトラフィックがコンテナにルーティングされず、プロセスが正常でない状態になる場合にコンテナが再起動されるので、ユーザーはイメージを安全にデプロイできます。

テンプレート

イメージと共にテンプレートサンプルを提供することも検討してください。テンプレートがあると、ユーザーは、正しく機能する設定を指定してイメージをすばやく簡単にデプロイできるようになります。完全を期するため、テンプレートには、イメージに関連して記述した liveness および readiness プローブを含めるようにしてください。

追加リソース

- [Docker basics](#)
- [Dockerfile reference](#)
- [Project Atomic Guidance for Container Image Authors](#)

3.2. イメージへのメタデータの組み込み

イメージのメタデータを定義することで、OpenShift Container Platform によるコンテナイメージの使用が改善され、開発者が OpenShift Container Platform でイメージを使用しやすくなります。たとえば、メタデータを追加して、イメージに関する役立つ情報を提供したり、必要とされる可能性のある他のイメージを提案したりできます。

このトピックでは、現在の一連のユースケースに必要なメタデータのみを定義します。他のメタデータまたはユースケースは、今後追加される可能性があります。

3.2.1. イメージメタデータの定義

Dockerfile で **LABEL** 命令を使用して、イメージのメタデータを定義することができます。ラベルは、イメージやコンテナに割り当てるキーと値のペアである点で環境変数と似ています。ただし、ラベルは、実行中のアプリケーションに表示されず、イメージやコンテナをすばやく検索する場合にも使用できる点で、環境変数とは異なります。

LABEL 命令に関する詳細は、[Docker ドキュメント](#)を参照してください。

ラベル名には、通常 namespace を指定する必要があります。namespace は、対象のラベルを選択して使用するプロジェクトを反映するように設定してください。OpenShift Container Platform の場合は、namespace は **io.openshift** に、Kubernetes の場合は、namespace は **io.k8s** に設定してください。

形式に関する詳細は、[Docker のカスタムメタデータ](#)に関するドキュメントを参照してください。

表3.1 サポートされるメタデータ

変数	説明
io.openshift.tags	<p>このラベルには、カンマ区切りの文字列値の一覧として表現されているタグの一覧が含まれます。タグを使用して、コンテナイメージを幅広い機能エリアに分類します。タグを使用すると、UI および生成ツールがアプリケーションの作成プロセスで適切なコンテナイメージを提案しやすくなります。</p> <pre data-bbox="520 450 1238 495">LABEL io.openshift.tags mongodb,mongodb24,nosql</pre>
io.openshift.wants	<p>コンテナイメージにすでにタグが指定されていない場合に、生成ツールと UI が適切な提案を行うのに使用するタグの一覧を指定します。たとえば、コンテナイメージに mysql と redis が必要で、コンテナイメージに redis タグが指定されていない場合には、UI はこのイメージをデプロイメントに追加するように提案する可能性があります。</p> <pre data-bbox="520 797 1094 842">LABEL io.openshift.wants mongodb,redis</pre>
io.k8s.description	<p>このラベルは、コンテナイメージの利用者に、このイメージが提供するサービスや機能に関する詳細情報を提供するのに使用できます。UI は、この説明とコンテナイメージ名を使用して、人間が解読しやすい情報をエンドユーザーに提供します。</p> <pre data-bbox="520 1111 1402 1189">LABEL io.k8s.description The MySQL 5.5 Server with master-slave replication support</pre>
io.openshift.non-scalable	<p>イメージは、この変数を使用して、スケーリングがサポートされていない旨を示します。その後、UI はこれをそのイメージのコンシューマーに通知します。スケーリング不可にした場合は基本的に replicas の値を最初に1よりも大きい値に設定することはできません。</p> <pre data-bbox="520 1458 1059 1503">LABEL io.openshift.non-scalable true</pre>
io.openshift.min-memory および io.openshift.min-cpu	<p>このラベルは、コンテナイメージが正しく機能するにはどの程度リソースが必要かを提案します。UI でユーザーに対し、このコンテナイメージをデプロイすると、ユーザークォータを超過する可能性があることを警告します。この値は、Kubernetes の数量と互換性がある必要があります。</p> <pre data-bbox="520 1771 1023 1850">LABEL io.openshift.min-memory 8Gi LABEL io.openshift.min-cpu 4</pre>

3.3. S2I イメージのテスト

Source-to-Image (S2I) ビルダーイメージの作成者は、S2I イメージをローカルでテストして、自動テストや継続的な統合に OpenShift Container Platform ビルドシステムを使用できます。

S2I ビルドを正常に実行するには、S2I に **assemble** と **run** スクリプトが必要です。S2I 外のコンテナイメージを実行した場合に、**save-artifacts** スクリプトがあると、ビルドのアーティファクトが再利用され、**usage** スクリプトがあると、使用についての情報がコンソールに出力されるようになります。

S2I イメージのテストは、ベースのコンテナイメージを変更したり、コマンドが使用するツールが更新されたりした場合でも、上記のコマンドが正しく機能することを確認するのが目的です。

3.3.1. テスト要件について

test スクリプトは、基本的に **test/run** に配置されます。このスクリプトは、OpenShift Container Platform S2I イメージビルダーが呼び出し、単純な Bash スクリプトか静的な Go バイナリーのいずれかの形式を取ることができます。

test/run スクリプトは S2I ビルドを実行するので、S2I バイナリーを **\$PATH** で利用可能にしておく必要があります。必要に応じて、[S2I README](#) のインストール手順に従います。

S2I は、アプリケーションのソースコードおよびビルダーイメージを統合します。これをテストするには、ソースが実行可能なコンテナイメージに変換されることを検証するためのサンプルアプリケーションのソースが必要です。サンプルアプリケーションは単純なものである必要がありますが、**assemble** および **run** スクリプトの重要な手順を実行できる必要があります。

3.3.2. スクリプトおよびツールの生成

S2I ツールは、新しい S2I イメージの作成プロセスを加速化する強力な生成ツールと共に提供されます。**s2i create** コマンドでは、**Makefile** 以外に、必要とされる S2I スクリプトとテストツールすべてが生成されます。

```
$ s2i create <image name> <destination directory>
```

生成された **test/run** スクリプトは、より使いやすくするために調整する必要がありますが、このスクリプトを開発の開始段階で使用することが推奨されます。



注記

s2i create コマンドで生成した **test/run** スクリプトでは、サンプルアプリケーションのソースを **test/test-app** ディレクトリーに配置しておく必要があります。

3.3.3. ローカルでのテスト

S2I イメージテストをローカルに実行する最も簡単な方法として、生成した **Makefile** を使用することができます。

s2i create コマンドを使用しない場合には、以下の **Makefile** テンプレートをコピーして、**IMAGE_NAME** パラメーターをお使いのイメージ名に置き換えることができます。

Makefile の例

```
IMAGE_NAME = openshift/ruby-20-centos7
CONTAINER_ENGINE := $(shell command -v podman 2> /dev/null | echo docker)

build:
  ${CONTAINER_ENGINE} build -t $(IMAGE_NAME) .

.PHONY: test
```



```
test:
  ${CONTAINER_ENGINE} build -t $(IMAGE_NAME)-candidate .
  IMAGE_NAME=$(IMAGE_NAME)-candidate test/run
```

3.3.4. テストの基本的なワークフロー

`test` スクリプトは、テストするイメージをすでにビルドしていることが前提です。必要に応じて、以下のコマンドで S2I イメージを先にビルドしてください。以下のいずれかのコマンドを実行してください。

- Podman を使用する場合は、以下のコマンドを実行します。

```
$ podman build -t <BUILDER_IMAGE_NAME>_
```

- Docker を使用する場合は、以下のコマンドを実行します。

```
$ docker build -t <BUILDER_IMAGE_NAME>_
```

以下の手順では、S2I イメージビルダーをテストするデフォルトのワークフローを説明しています。

1. `usage` スクリプトが機能していることを確認します。

- Podman を使用する場合は、以下のコマンドを実行します。

```
$ podman run <BUILDER_IMAGE_NAME>_ .
```

- Docker を使用する場合は、以下のコマンドを実行します。

```
$ docker run <BUILDER_IMAGE_NAME>_ .
```

2. イメージをビルドします。

```
$ s2i build file:///path-to-sample-app <BUILDER_IMAGE_NAME>_
  <OUTPUT_APPLICATION_IMAGE_NAME>_
```

3. オプション: `save-artifacts` をサポートする場合には、再度手順 2 を実行して、保存して復元するアーティファクトが正しく機能することを確認します。

4. コンテナを実行します。

- Podman を使用する場合は、以下のコマンドを実行します。

```
$ podman run <OUTPUT_APPLICATION_IMAGE_NAME>_
```

- Docker を使用する場合は、以下のコマンドを実行します。

```
$ docker run <OUTPUT_APPLICATION_IMAGE_NAME>_
```

5. コンテナが実行され、アプリケーションが応答していることを確認します。

これらの手順を実行すると、通常はビルダーイメージが予想通りに機能しているかどうか分かります。

3.3.5. イメージのビルドでの OpenShift Container Platform の使用

新しい S2I ビルダーイメージを構成する **Dockerfile** と他のアーティファクトが準備できたら、それらを git リポジトリに配置して、OpenShift Container Platform を使用し、イメージをビルドしてプッシュします。その後は、お使いのリポジトリを参照する Docker ビルドを定義することのみが必要になります。

OpenShift Container Platform インスタンスが公開 IP アドレスでホストされる場合、ビルドは、S2I ビルダーイメージ GitHub リポジトリにプッシュするたびにトリガーされます。

ImageChangeTrigger を使用して、更新した S2I ビルダーイメージに基づくアプリケーションの再ビルドをトリガーすることもできます。

第4章 イメージの管理

4.1. イメージの管理の概要

OpenShift Container Platform では、イメージのレジストリーが置かれる場所やレジストリー関連の認証要件、およびビルドとデプロイメントで必要とされる動作に応じてイメージと対話し、イメージストリームをセットアップできます。

4.1.1. イメージの概要

イメージストリームは、タグで識別される数多くのコンテナイメージで構成されます。これはコンテナイメージリポジトリのように関連イメージの単一仮想ビューを提供します。

イメージストリームを監視することにより、ビルドおよびデプロイメントは新規イメージの追加または変更時に通知を受信し、それぞれビルドまたはデプロイメントを実行してこれに対応します。

4.2. イメージのタグ付け

以下のセクションでは、OpenShift Container Platform イメージストリームおよびそれらのタグを操作するためにコンテナイメージのコンテキストでイメージタグを使用する概要および方法について説明します。

4.2.1. イメージタグ

イメージタグは、イメージストリーム内の他のイメージから特定のイメージを識別するリポジトリのコンテナイメージに適用されるラベルです。通常、タグはある種のバージョン番号を表します。たとえば、ここでは `v3.11.59-2` がタグになります。

```
registry.access.redhat.com/openshift3/jenkins-2-rhel7:v3.11.59-2
```

イメージにタグを追加することができます。たとえば、イメージには `:v3.11.59-2` および `:latest` というタグが割り当てられる可能性があります。

OpenShift Container Platform は `docker tag` コマンドに似ている `oc tag` コマンドを提供しますが、イメージ上で直接動作するのではなくイメージストリーム上で動作します。

4.2.2. イメージタグの規則

イメージは時間の経過と共に変化するもので、それらのタグはその変化を反映します。ほとんどの場合、イメージタグはビルドされる最新イメージを常に参照します。

v2.0.1-may-2019 のように、タグ名に非常に多くの情報が組み込まれる場合、タグはイメージの単一のリビジョンのみを参照し、更新されることはありません。デフォルトのイメージのプルニングオプションを使用しても、このようなイメージは削除されません。非常に大規模なクラスターでは、イメージが修正されるたびに新規タグが作成される設定の場合、古くなって久しいイメージの余分のタグメタデータで etcd データストアが一杯になる可能性があります。

タグの名前が **v2.0** である場合はイメージのリビジョンの数が増えることが予想されます。これによりタグ履歴が長くなるため、イメージプルーナーが古くなり使われなくなったイメージを削除する可能性が高くなります。

タグの名前付け規則は各自で定めることができますが、ここでは `<image_name>:<image_tag>` 形式のいくつかの例を見てみましょう。

表4.1 イメージタグの名前付け規則

説明	例
リビジョン	<code>myimage:v2.0.1</code>
アーキテクチャー	<code>myimage:v2.0-x86_64</code>
ベースイメージ	<code>myimage:v1.2-centos7</code>
最新 (不安定な可能性がある)	<code>myimage:latest</code>
最新 (安定性がある)	<code>myimage:stable</code>

タグ名に日付を含める必要がある場合、古くなり使用されなくなったイメージおよび **istags** を定期的に検査し、これらを削除してください。そうしないと、古いイメージを保持して、リソースの使用量が增大する可能性があります。

4.2.3. タグのイメージストリームへの追加

OpenShift Container Platform のイメージストリームは、タグで識別される 0 個以上のコンテナイメージで構成されます。

各種のタグを利用できます。デフォルト動作では、特定の時点の特定のイメージを参照する **永続タグ** を使用します。_permanent_tag が使用され、ソースが変更される場合、タグは宛先について変更されません。

追跡 タグの場合は、宛先タグのメタデータがソースタグのインポート時に更新されます。

手順

- **oc tag** コマンドを使用して、タグをイメージストリームに追加できます。

```
$ oc tag <source> <destination>
```

たとえば、**ruby** イメージストリームの **static-2.0** タグを **ruby** イメージストリーム **2.0** タグの現行のイメージを常に参照するように設定するには、以下を実行します。

```
$ oc tag ruby:2.0 ruby:static-2.0
```

これにより、**ruby** イメージストリームに **static-2.0** という名前のイメージストリームタグが新たに作成されます。この新規タグは、**oc tag** の実行時に **ruby:2.0** イメージストリームタグが参照したイメージ ID を直接参照し、これが参照するイメージが変更されることはありません。

- 宛先タグがソースタグの変更時に常に更新されるようにするには、**--alias=true** フラグを使用します。

```
$ oc tag --alias=true <source> <destination>
```



注記

永続的なエイリアス (**latest** または **stable** など) を作成するには、**追跡** タグを使用します。このタグは単一イメージストリーム内でのみ適切に機能します。複数のイメージストリーム間で使用されるエイリアスを作成しようとするとエラーが生じます。

- また、**--scheduled=true** フラグを追加して、宛先タグが定期的に更新 (再インポート) されるようにもできます。期間はシステムレベルでグローバルに設定できます。
- **--reference** フラグは、インポートされていないイメージストリームタグを作成します。このタグはソースの場所を参照しますが、これを永続的に参照します。統合レジストリーのタグ付けされたイメージを常にフェッチするように OpenShift に指示するには、**--reference-policy=local** を使用します。レジストリーはプルスルー (pull-through) 機能を使用してイメージをクライアントに提供します。デフォルトで、イメージ Blob はレジストリーによってローカルにミラーリングされます。その結果、それらが次回必要となる場合により迅速にプルされます。また、このフラグは **--insecure-registry** をコンテナランタイムに指定しなくても、イメージストリームに非セキュアなアノテーションがあるか、またはタグに非セキュアなインポートポリシーがある限り、非セキュアなレジストリーからのプルを許可します。

4.2.4. タグのイメージストリームからの削除

タグをイメージストリームから削除できます。

手順

タグをイメージストリームから完全に削除するには、以下を実行します。

```
$ oc delete istag/ruby:latest
```

または、以下を実行します。

```
$ oc tag -d ruby:latest
```

4.2.5. イメージストリームでのイメージの参照

タグを使用してイメージストリームのイメージを参照するには、以下の参照タイプを使用します。

表4.2 イメージストリームの参照タイプ

参照タイプ	説明
ImageStreamTag	ImageStreamTag は、所定のイメージストリームおよびタグのイメージを参照または取得するために使用されます。
ImageStreamImage	ImageStreamImage は、所定のイメージストリームおよびイメージの sha ID のイメージを参照または取得するために使用されます。

参照タイプ	説明
DockerImage	DockerImage は、所定の外部レジストリーのイメージを参照または取得するために使用されます。この名前は、標準の Docker プル仕様 に基づいて付けられます。

イメージストリーム定義のサンプルを表示すると、これらには **ImageStreamTag** の定義と **DockerImage** の参照が含まれていますが、**ImageStreamImage** に関連するものは何も含まれていないことに気づくでしょう。

これは、**ImageStreamImage** オブジェクトが、イメージをイメージストリームにインポートしたり、タグ付けしたりする際に OpenShift Container Platform に自動的に作成されるためです。イメージストリームを作成するために使用するイメージストリーム定義に **ImageStreamImage** オブジェクトを明示的に定義する必要はありません。

手順

- 所定のイメージストリームおよびタグのイメージを参照するには、**ImageStreamTag** を使用します。

```
<image_stream_name>:<tag>
```

- 所定のイメージストリームおよびイメージの **sha** ID のイメージを参照するには、**ImageStreamImage** を使用します。

```
<image_stream_name>@<id>
```

<id> は、ダイジェストとも呼ばれる特定イメージのイミュータブルな ID です。

- 所定の外部レジストリーのイメージを参照または取得するには、**DockerImage** を使用します。

```
openshift/ruby-20-centos7:2.0
```



注記

タグが指定されていない場合、**latest** タグが使用されることが想定されます。

サードパーティーのレジストリーを参照することもできます。

```
registry.redhat.io/rhel7:latest
```

またはダイジェストでイメージを参照できます。

```
centos/ruby-22-  
centos7@sha256:3a335d7d8a452970c5b4054ad7118ff134b3a6b50a2bb6d0c07c746e8986b2  
8e
```

4.2.6. 追加情報

- [CentOS イメージストリームのイメージストリーム定義の例。](#)

4.3. イメージプルポリシー

Pod のそれぞれのコンテナにはコンテナイメージが含まれます。イメージを作成してレジストリーにプッシュすると、このイメージを Pod で参照できます。

4.3.1. イメージプルポリシーの概要

OpenShift Container Platform はコンテナを作成する際に、コンテナの **imagePullPolicy** を使用して、コンテナの起動前にイメージをプルする必要があるかどうかを判別します。**imagePullPolicy** には以下の3つの値があります。

表4.3 imagePullPolicy の値

値	説明
Always	常にイメージをプルします。
IfNotPresent	イメージがノード上にない場合にのみイメージをプルします。
Never	イメージをプルしません。

コンテナの **imagePullPolicy** パラメーターが指定されていない場合、OpenShift Container Platform はイメージのタグに基づいてこれを設定します。

1. タグが **latest** の場合、OpenShift Container Platform は **imagePullPolicy** を **Always** にデフォルト設定します。
2. それ以外の場合に、OpenShift Container Platform は **imagePullPolicy** を **IfNotPresent** にデフォルト設定します。

4.4. イメージプルシークレットの使用

OpenShift Container Platform の内部レジストリーを使用し、同じプロジェクトにあるイメージストリームからプルしている場合は、Pod のサービスアカウントには適切なパーミッションがすでに設定されているため、追加のアクションは不要です。

ただし、OpenShift Container Platform プロジェクト全体でイメージを参照する場合や、セキュリティー保護されたレジストリーからイメージを参照するなどの他のシナリオでは、追加の設定手順が必要になります。

4.4.1. Pod が複数のプロジェクト間でイメージを参照できるようにする設定

内部レジストリーを使用している場合で **project-a** の Pod が **project-b** のイメージを参照できるようにするには、**project-a** のサービスアカウントが **project-b** の **system:image-puller** ロールにバインドされている必要があります。

手順

1. **project-a** の Pod が **project-b** のイメージを参照できるようにするには、**project-a** のサービスアカウントを **project-b** の **system:image-puller** ロールにバインドします。

```
$ oc policy add-role-to-user \
  system:image-puller system:serviceaccount:project-a:default \
  --namespace=project-b
```

このロールを追加すると、デフォルトのサービスアカウントを参照する **project-a** の Pod は **project-b** からイメージをプルできるようになります。

2. **project-a** のすべてのサービスアカウントにアクセスを許可するには、**グループ**を使用します。

```
$ oc policy add-role-to-group \
  system:image-puller system:serviceaccounts:project-a \
  --namespace=project-b
```

4.4.2. Pod が他のセキュリティー保護されたレジストリーからイメージを参照できるようにする設定

Docker クライアントの **.dockercfg \$HOME/.docker/config.json** ファイルは、セキュア/非セキュアなレジストリーに事前にログインしている場合に認証情報を保存する Docker 認証情報ファイルです。

OpenShift Container Platform の内部レジストリーにないセキュリティー保護されたコンテナイメージをプルするには、Docker 認証情報でプルシークレットを作成し、これをサービスアカウントに追加する必要があります。

手順

- セキュリティー保護されたレジストリーの **.dockercfg** ファイルがすでにある場合は、以下を実行してそのファイルからシークレットを作成できます。

```
$ oc create secret generic <pull_secret_name> \
  --from-file=.dockercfg=<path/to/.dockercfg> \
  --type=kubernetes.io/dockercfg
```

- または、**\$HOME/.docker/config.json** ファイルがある場合は以下を実行します。

```
$ oc create secret generic <pull_secret_name> \
  --from-file=.dockerconfigjson=<path/to/.docker/config.json> \
  --type=kubernetes.io/dockerconfigjson
```

- セキュリティー保護されたレジストリーの Docker 認証情報がない場合は、以下を実行してシークレットを作成できます。

```
$ oc create secret docker-registry <pull_secret_name> \
  --docker-server=<registry_server> \
  --docker-username=<user_name> \
  --docker-password=<password> \
  --docker-email=<email>
```

- Pod のイメージのプルにシークレットを使用するには、シークレットをサービスアカウントに追加する必要があります。この例では、サービスアカウントの名前は、Pod が使用するサービスアカウントの名前に一致する必要があります。**default** はデフォルトのサービスアカウントです。

```
$ oc secrets link default <pull_secret_name> --for=pull
```


- ビルドイメージのプッシュおよびプルにシークレットを使用するには、シークレットは Pod 内でマウント可能である必要があります。以下でこれを実行できます。

```
$ oc secrets link builder <pull_secret_name>
```

4.4.2.1. 委任された認証を使用したプライベートレジストリーからのプル

プライベートレジストリーは認証を別個のサービスに委任できます。この場合、イメージプルシークレットは認証およびレジストリーのエンドポイントの両方に対して定義される必要があります。

手順

1. 委任された認証サーバーのシークレットを作成します。

```
$ oc create secret docker-registry \  
  --docker-server=sso.redhat.com \  
  --docker-username=developer@example.com \  
  --docker-password=***** \  
  --docker-email=unused \  
  redhat-connect-sso  
  
secret/redhat-connect-sso
```

2. プライベートレジストリーのシークレットを作成します。

```
$ oc create secret docker-registry \  
  --docker-server=privateregistry.example.com \  
  --docker-username=developer@example.com \  
  --docker-password=***** \  
  --docker-email=unused \  
  private-registry  
  
secret/private-registry
```

第5章 イメージストリームの管理

イメージストリームは、継続的な方法でコンテナイメージの作成および更新を行う手段を提供します。イメージの改良により、タグを使用して新規バージョン番号を割り当て、変更を追跡できるようになりました。本書では、イメージストリームの管理方法について説明します。

5.1. イメージストリームの使用

イメージストリームおよびその関連付けられたタグは、OpenShift Container Platform 内でコンテナイメージを参照するための抽象化を提供します。イメージストリームとそのタグを使用して、利用可能なイメージを確認し、リポジトリのイメージが変更される場合でも必要な特定のイメージを使用していることを確認できます。

イメージストリームには実際のイメージデータは含まれませんが、イメージリポジトリと同様に、関連するイメージの単一の仮想ビューを提示します。

ビルドおよびデプロイメントは、イメージストリームで新規イメージの追加時の通知の有無を監視するように設定し、ビルドまたはデプロイメントをそれぞれ実行してこれに対応するように設定できます。

たとえば、デプロイメントで特定のイメージを使用していて、そのイメージの新規バージョンが作成される場合、デプロイメントを、そのイメージの新規バージョンを選択できるように自動的に実行します。

ただし、デプロイメントまたはビルドで使用されるイメージストリームタグが更新されない場合は、コンテナイメージレジストリーのコンテナイメージが更新されても、ビルドまたはデプロイメントは以前のおそらくは既知の正常なイメージをそのまま使用します。

ソースイメージは以下のいずれかに保存できます。

- OpenShift Container Platform の統合レジストリー
- **registry.redhat.io** または **hub.docker.com** などの外部レジストリー
- OpenShift Container Platform クラスターの他のイメージストリーム

(ビルドまたはデプロイメント設定などの) イメージストリームタグを参照するオブジェクトを定義する場合は、Docker リポジトリではなく、イメージストリームタグを参照します。アプリケーションのビルドまたはデプロイ時に、OpenShift Container Platform はイメージストリームタグを使用して Docker リポジトリにクエリーを送信し、イメージの関連付けられた ID を特定し、正確なイメージを使用します。

イメージストリームメタデータは他のクラスター情報と共に etcd インスタンスに保存されます。

イメージストリームの使用には、いくつかの大きな利点があります。

- コマンドラインを使用して再プッシュすることなく、タグ付けや、タグのロールバック、およびイメージの迅速な処理を実行できます。
- 新規イメージがレジストリーにプッシュされると、ビルドおよびデプロイメントをトリガーできます。また、OpenShift Container Platform には他のリソースの汎用トリガーがあります (Kubernetes オブジェクトなど)。
- 定期的な再インポートを実行するためにタグにマークを付けることができます。ソースイメージが変更された場合、その変更は認識され、イメージストリームに反映されます。これにより、ビルドまたはデプロイメント設定のいずれかに応じて、ビルドおよび/またはデプロイメントフローがトリガーされます。

- 詳細なアクセス制御を使用してイメージを共有し、チーム間でイメージを迅速に分散できます。
- ソースイメージが変更されても、イメージストリームタグはイメージの既知の正常なバージョンを参照したままになり、アプリケーションに予期しない障害が発生しないようにします。
- イメージストリームオブジェクトのパーミッションを使用して、イメージを表示し、使用できるユーザーについてのセキュリティー設定を行うことができます。
- クラスターレベルでイメージを読み込んだり、一覧表示するパーミッションのないユーザーでも、イメージストリームを使用してプロジェクトでタグ付けされたイメージを取得できます。

5.2. イメージストリームの設定

イメージストリームオブジェクトには以下の要素が含まれます。

イメージストリームオブジェクト定義

```

apiVersion: v1
kind: ImageStream
metadata:
  annotations:
    openshift.io/generated-by: OpenShiftNewApp
  creationTimestamp: 2017-09-29T13:33:49Z
  generation: 1
  labels:
    app: ruby-sample-build
    template: application-template-stibuild
  name: origin-ruby-sample 1
  namespace: test
  resourceVersion: "633"
  selflink: /oapi/v1/namespaces/test/imagestreams/origin-ruby-sample
  uid: ee2b9405-c68c-11e5-8a99-525400f25e34
spec: {}
status:
  dockerImageRepository: 172.30.56.218:5000/test/origin-ruby-sample 2
  tags:
  - items:
    - created: 2017-09-02T10:15:09Z
      dockerImageReference: 172.30.56.218:5000/test/origin-ruby-
sample@sha256:47463d94eb5c049b2d23b03a9530bf944f8f967a0fe79147dd6b9135bf7dd13d 3
      generation: 2
      image: sha256:909de62d1f609a717ec433cc25ca5cf00941545c83a01fb31527771e1fab3fc5 4
    - created: 2017-09-29T13:40:11Z
      dockerImageReference: 172.30.56.218:5000/test/origin-ruby-
sample@sha256:909de62d1f609a717ec433cc25ca5cf00941545c83a01fb31527771e1fab3fc5
      generation: 1
      image: sha256:47463d94eb5c049b2d23b03a9530bf944f8f967a0fe79147dd6b9135bf7dd13d
      tag: latest 5

```

1 イメージストリームの名前です。

2 新規イメージをこのイメージストリームで追加/更新するためにプッシュできる Docker リポジトリパスです。

- 3 このイメージストリームタグが現在参照している SHA ID です。このイメージストリームタグを参照するリソースはこの ID を使用します。
- 4 このイメージストリームタグが以前に参照した SHA ID です。古いイメージにロールバックするために使用できます。
- 5 イメージストリームタグ名。

5.3. イメージストリームイメージ

イメージストリームイメージは、イメージストリーム内から特定のイメージ ID を参照します。

イメージストリームイメージにより、タグ付けされている特定のイメージストリームからイメージについてのメタデータを取得できます。

イメージストリームイメージオブジェクトは、イメージをイメージストリームにインポートしたり、タグ付けしたりする場合には OpenShift Container Platform に常に自動的に作成されます。イメージストリームを作成するために使用するイメージストリームイメージオブジェクトをイメージストリーム定義に明示的に定義する必要はありません。

イメージストリームイメージはリポジトリからのイメージストリーム名およびイメージ ID で構成されており、@ 記号で区切られています。

```
<image-stream-name>@<image-id>
```

イメージストリームオブジェクトのサンプルでイメージを参照する際、イメージストリームのイメージは以下のようになります。

```
origin-ruby-
sample@sha256:47463d94eb5c049b2d23b03a9530bf944f8f967a0fe79147dd6b9135bf7dd13d
```

5.4. イメージストリームタグ

イメージストリームタグは、イメージストリームのイメージに対する名前付きポインターです。これは **istag** として省略されることが多くあります。イメージストリームタグは、所定のイメージストリームおよびタグのイメージを参照または取得するために使用されます。

イメージストリームタグは、ローカルの、または外部で管理されるイメージを参照できます。これには、タグが参照したすべてのイメージのスタックとして表されるイメージの履歴が含まれます。新規または既存のイメージが特定のイメージストリームタグでタグ付けされる場合はいつでも、これは履歴スタックの最初の位置に置かれます。これまで先頭の位置を占めていたイメージは 2 番目の位置などに置かれます。これにより、タグを過去のイメージに再び参照させるよう簡単にロールバックできます。

以下のイメージストリームタグは、イメージストリームオブジェクトからのものです。

履歴内に 2 つのイメージを持つイメージストリームタグ

```
tags:
- items:
- created: 2017-09-02T10:15:09Z
  dockerImageReference: 172.30.56.218:5000/test/origin-ruby-
sample@sha256:47463d94eb5c049b2d23b03a9530bf944f8f967a0fe79147dd6b9135bf7dd13d
  generation: 2
```

```

image: sha256:909de62d1f609a717ec433cc25ca5cf00941545c83a01fb31527771e1fab3fc5
- created: 2017-09-29T13:40:11Z
dockerImageReference: 172.30.56.218:5000/test/origin-ruby-
sample@sha256:909de62d1f609a717ec433cc25ca5cf00941545c83a01fb31527771e1fab3fc5
generation: 1
image: sha256:47463d94eb5c049b2d23b03a9530bf944f8f967a0fe79147dd6b9135bf7dd13d
tag: latest

```

イメージストリームタグは**永続タグ**または**追跡タグ**にすることができます。

- **永続タグ** は、Python 3.5 などの特定バージョンのイメージを参照するバージョン固有のタグです。
- **追跡タグ** は別のイメージストリームタグをフォローする参照タグで、シンボリックリンクのように、フォローするイメージを変更するために今後更新される可能性があります。このような新規レベルでは後方互換性が確保されない点に注意してください。
たとえば、OpenShift Container Platform に同梱される **latest** イメージストリームタグは追跡タグです。これは、**latest** イメージストリームタグのコンシューマーが、新規レベルが利用可能になると、イメージで提供されるフレームワークの最新レベルに更新されることを意味します。**v3.10** への **latest** イメージストリームタグは、いつでも **v3.11** に変更される可能性があります。これらの **latest** イメージストリームタグは Docker **latest** タグと異なる動作をすることに注意してください。この場合、**latest** イメージストリームタグは Docker リポジトリの最新イメージを参照しません。これは別のイメージストリームタグを参照し、これはイメージの最新バージョンではない可能性があります。たとえば、**latest** イメージストリームタグがイメージの **v3.10** を参照する場合、**3.11** バージョンがリリースされても **latest** タグは **v3.11** に自動的に更新されず、これが **v3.11** イメージストリームタグを参照するように手動で更新されるまで **v3.10** を参照したままになります。



注記

追跡タグは単一のイメージストリームに制限され、他のイメージストリームを参照できません。

各自のニーズに合わせて独自のイメージストリームタグを作成できます。

イメージストリームタグは、コロンで区切られた、イメージストリームの名前とタグで構成されています。

```
<imagestream name>:<tag>
```

たとえば、上記のイメージストリームオブジェクトのサンプルで **sha256:47463d94eb5c049b2d23b03a9530bf944f8f967a0fe79147dd6b9135bf7dd13d** イメージを参照するには、イメージストリームタグは以下ようになります。

```
origin-ruby-sample:latest
```

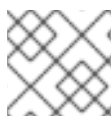
5.5. イメージストリーム変更トリガー

イメージストリームトリガーにより、ビルドおよびデプロイメントは、アップストリームイメージの新規バージョンが利用可能になると自動的に起動します。

たとえば、ビルドおよびデプロイメントは、イメージストリームタグの変更時に自動的に起動します。これは、特定のイメージストリームタグをモニターし、変更の検出時にビルドまたはデプロイメントに通知することで実行されます。

5.6. イメージストリームのマッピング

統合レジストリーが新規イメージを受信する際、これは OpenShift Container Platform にマップするイメージストリームを作成し、送信し、イメージのプロジェクト、名前、タグおよびイメージメタデータを提供します。



注記

イメージストリームのマッピング設定は高度な機能です。

この情報は、新規イメージを作成する際 (すでに存在しない場合) やイメージをイメージストリームにタグ付けする際に使用されます。OpenShift Container Platform は、コマンド、エントリーポイント、および環境変数などの各イメージについての完全なメタデータを保存します。OpenShift Container Platform のイメージはイミュータブル (変更不可能) であり、名前の最大長さは 63 文字です。

以下のイメージストリームマッピングのサンプルにより、イメージが **test/origin-ruby-sample:latest** としてタグ付けされます。

イメージストリームマッピングオブジェクト定義

```
apiVersion: v1
kind: ImageStreamMapping
metadata:
  creationTimestamp: null
  name: origin-ruby-sample
  namespace: test
tag: latest
image:
  dockerImageLayers:
  - name: sha256:5f70bf18a086007016e948b04aed3b82103a36bea41755b6cddf10ace3c6ef
    size: 0
  - name: sha256:ee1dd2cb6df21971f4af6de0f1d7782b81fb63156801cfde2bb47b4247c23c29
    size: 196634330
  - name: sha256:5f70bf18a086007016e948b04aed3b82103a36bea41755b6cddf10ace3c6ef
    size: 0
  - name: sha256:5f70bf18a086007016e948b04aed3b82103a36bea41755b6cddf10ace3c6ef
    size: 0
  - name: sha256:ca062656bff07f18bff46be00f40cfbb069687ec124ac0aa038fd676cfaea092
    size: 177723024
  - name: sha256:63d529c59c92843c395befd065de516ee9ed4995549f8218eac6ff088bfa6b6e
    size: 55679776
  - name: sha256:92114219a04977b5563d7dff71ec4caa3a37a15b266ce42ee8f43dba9798c966
    size: 11939149
  dockerImageMetadata:
    Architecture: amd64
    Config:
      Cmd:
      - /usr/libexec/s2i/run
      Entrypoint:
      - container-entrypoint
      Env:
      - RACK_ENV=production
      - OPENSIFT_BUILD_NAMESPACE=test
      - OPENSIFT_BUILD_SOURCE=https://github.com/openshift/ruby-hello-world.git
      - EXAMPLE=sample-app
```

```

- OPENSIFT_BUILD_NAME=ruby-sample-build-1
- PATH=/opt/app-root/src/bin:/opt/app-
root/bin:/usr/local/sbin:/usr/local/bin:/usr/sbin:/usr/bin:/sbin:/bin
- STI_SCRIPTS_URL=image:///usr/libexec/s2i
- STI_SCRIPTS_PATH=/usr/libexec/s2i
- HOME=/opt/app-root/src
- BASH_ENV=/opt/app-root/etc/scl_enable
- ENV=/opt/app-root/etc/scl_enable
- PROMPT_COMMAND=. /opt/app-root/etc/scl_enable
- RUBY_VERSION=2.2
ExposedPorts:
  8080/tcp: {}
Labels:
  build-date: 2015-12-23
  io.k8s.description: Platform for building and running Ruby 2.2 applications
  io.k8s.display-name: 172.30.56.218:5000/test/origin-ruby-sample:latest
  io.openshift.build.commit.author: Ben Parees <bparees@users.noreply.github.com>
  io.openshift.build.commit.date: Wed Jan 20 10:14:27 2016 -0500
  io.openshift.build.commit.id: 00cadc392d39d5ef9117cbc8a31db0889eedd442
  io.openshift.build.commit.message: 'Merge pull request #51 from php-coder/fix_url_and_sti'
  io.openshift.build.commit.ref: master
  io.openshift.build.image: centos/ruby-22-
centos7@sha256:3a335d7d8a452970c5b4054ad7118ff134b3a6b50a2bb6d0c07c746e8986b28e
  io.openshift.build.source-location: https://github.com/openshift/ruby-hello-world.git
  io.openshift.builder-base-version: 8d95148
  io.openshift.builder-version: 8847438ba06307f86ac877465eadc835201241df
  io.openshift.s2i.scripts-url: image:///usr/libexec/s2i
  io.openshift.tags: builder,ruby,ruby22
  io.s2i.scripts-url: image:///usr/libexec/s2i
  license: GPLv2
  name: CentOS Base Image
  vendor: CentOS
User: "1001"
WorkingDir: /opt/app-root/src
Container: 86e9a4a3c760271671ab913616c51c9f3cea846ca524bf07c04a6f6c9e103a76
ContainerConfig:
  AttachStdout: true
  Cmd:
  - /bin/sh
  - -c
  - tar -C /tmp -xf - && /usr/libexec/s2i/assemble
  Entrypoint:
  - container-entrypoint
  Env:
  - RACK_ENV=production
  - OPENSIFT_BUILD_NAME=ruby-sample-build-1
  - OPENSIFT_BUILD_NAMESPACE=test
  - OPENSIFT_BUILD_SOURCE=https://github.com/openshift/ruby-hello-world.git
  - EXAMPLE=sample-app
  - PATH=/opt/app-root/src/bin:/opt/app-
root/bin:/usr/local/sbin:/usr/local/bin:/usr/sbin:/usr/bin:/sbin:/bin
  - STI_SCRIPTS_URL=image:///usr/libexec/s2i
  - STI_SCRIPTS_PATH=/usr/libexec/s2i
  - HOME=/opt/app-root/src
  - BASH_ENV=/opt/app-root/etc/scl_enable
  - ENV=/opt/app-root/etc/scl_enable

```



```

- PROMPT_COMMAND=. /opt/app-root/etc/scl_enable
- RUBY_VERSION=2.2
ExposedPorts:
  8080/tcp: {}
Hostname: ruby-sample-build-1-build
Image: centos/ruby-22-
centos7@sha256:3a335d7d8a452970c5b4054ad7118ff134b3a6b50a2bb6d0c07c746e8986b28e
OpenStdin: true
StdinOnce: true
User: "1001"
WorkingDir: /opt/app-root/src
Created: 2016-01-29T13:40:00Z
DockerVersion: 1.8.2.fc21
Id: 9d7fd5e2d15495802028c569d544329f4286dcd1c9c085ff5699218dbaa69b43
Parent: 57b08d979c86f4500dc8cad639c9518744c8dd39447c055a3517dc9c18d6fccd
Size: 441976279
apiVersion: "1.0"
kind: DockerImage
dockerImageMetadataVersion: "1.0"
dockerImageReference: 172.30.56.218:5000/test/origin-ruby-
sample@sha256:47463d94eb5c049b2d23b03a9530bf944f8f967a0fe79147dd6b9135bf7dd13d

```

5.7. イメージストリームの使用

以下のセクションでは、イメージストリームおよびイメージストリームタグの使用方法を説明します。

5.7.1. イメージストリームについての情報の取得

イメージストリームについての一般的な情報およびこれがポイントするすべてのタグについての詳細情報を取得することができます。

手順

- イメージストリームについての一般的な情報およびこれがポイントするすべてのタグについての詳細情報を取得します。

```
$ oc describe is/<image-name>
```

例:

```

$ oc describe is/python

Name: python
Namespace: default
Created: About a minute ago
Labels: <none>
Annotations: openshift.io/image.dockerRepositoryCheck=2017-10-02T17:05:11Z
Docker Pull Spec: docker-registry.default.svc:5000/default/python
Image Lookup: local=false
Unique Images: 1
Tags: 1

3.5
tagged from centos/python-35-centos7

```



```
* centos/python-35-
centos7@sha256:49c18358df82f4577386404991c51a9559f243e0b1bdc366df25
About a minute ago
```

- 特定のイメージストリームタグについての利用可能な情報をすべて取得します。

```
$ oc describe istag/<image-stream>:<tag-name>
```

例:

```
$ oc describe istag/python:latest

Image Name: sha256:49c18358df82f4577386404991c51a9559f243e0b1bdc366df25
Docker Image: centos/python-35-
centos7@sha256:49c18358df82f4577386404991c51a9559f243e0b1bdc366df25
Name: sha256:49c18358df82f4577386404991c51a9559f243e0b1bdc366df25
Created: 2 minutes ago
Image Size: 251.2 MB (first layer 2.898 MB, last binary layer 72.26 MB)
Image Created: 2 weeks ago
Author: <none>
Arch: amd64
Entrypoint: container-entrpoint
Command: /bin/sh -c $STI_SCRIPTS_PATH/usage
Working Dir: /opt/app-root/src
User: 1001
Exposes Ports: 8080/tcp
Docker Labels: build-date=20170801
```



注記

表示されている以上の情報が出力されます。

5.7.2. タグのイメージストリームへの追加

追加タグをイメージストリームに追加できます。

手順

- 既存タグのいずれかを参照するタグを追加するには、**oc tag** コマンドを使用できます。

```
$ oc tag <image-name:tag1> <image-name:tag2>
```

例:

```
$ oc tag python:3.5 python:latest

Tag python:latest set to
python@sha256:49c18358df82f4577386404991c51a9559f243e0b1bdc366df25.
```

- イメージストリームに、外部コンテナイメージを参照するタグ (**3.5**) と、この最初のタグに基づいて作成されているために同じイメージを参照する別のタグ (**latest**) の2つのタグが含まれることを確認します。

```
$ oc describe is/python
```

```
Name: python
Namespace: default
Created: 5 minutes ago
Labels: <none>
Annotations: openshift.io/image.dockerRepositoryCheck=2017-10-02T17:05:11Z
Docker Pull Spec: docker-registry.default.svc:5000/default/python
Image Lookup: local=false
Unique Images: 1
Tags: 2
```

```
latest
  tagged from
  python@sha256:49c18358df82f4577386404991c51a9559f243e0b1bdc366df25
```

```
* centos/python-35-
centos7@sha256:49c18358df82f4577386404991c51a9559f243e0b1bdc366df25
  About a minute ago
```

```
3.5
  tagged from centos/python-35-centos7
```

```
* centos/python-35-
centos7@sha256:49c18358df82f4577386404991c51a9559f243e0b1bdc366df25
  5 minutes ago
```

5.7.3. 外部イメージのタグの追加

外部イメージのタグを追加することができます。

手順

- タグ関連のすべての操作に **oc tag** コマンドを使用して、内部または外部イメージをポイントするタグを追加します。

```
$ oc tag <repository/image> <image-name:tag>
```

たとえば、このコマンドは **docker.io/python:3.6.0** イメージを **python** イメージストリームの **3.6** タグにマップします。

```
$ oc tag docker.io/python:3.6.0 python:3.6
Tag python:3.6 set to docker.io/python:3.6.0.
```

外部イメージのセキュリティーが保護されている場合、そのレジストリーにアクセスするために認証情報を使ってシークレットを作成する必要があります

5.7.4. イメージストリームタグの更新

別のタグをイメージストリームに反映するようタグを更新できます。

手順

- タグを更新します。

```
$ oc tag <image-name:tag> <image-name:latest>
```

たとえば、以下では **3.6** タグをイメージストリームに反映させるように **latest** タグを更新します。

```
$ oc tag python:3.6 python:latest
Tag python:latest set to
python@sha256:438208801c4806548460b27bd1fbc7bb188273d13871ab43f.
```

5.7.5. イメージストリームタグの削除

古いタグをイメージストリームから削除できます。

手順

- 古いタグをイメージストリームから削除します。

```
$ oc tag -d <image-name:tag>
```

例:

```
$ oc tag -d python:3.5
Deleted tag default/python:3.5.
```

5.7.6. イメージストリームタグの定期的なインポートの設定

外部コンテナイメージレジストリーを使用している場合、(最新のセキュリティー更新を取得する場合などに) イメージを定期的に再インポートするには、**--scheduled** フラグを使用します。

手順

- イメージインポートのスケジュール

```
$ oc tag <repository/image> <image-name:tag> --scheduled
```

例:

```
$ oc tag docker.io/python:3.6.0 python:3.6 --scheduled
Tag python:3.6 set to import docker.io/python:3.6.0 periodically.
```

このコマンドにより、OpenShift Container Platform はこの特定のイメージストリームタグを定期的に更新します。この期間はクラスター全体のデフォルトで15分に設定されます。

- 定期的なチェックを削除するには、上記のコマンド再実行しますが、**--scheduled** フラグを省略します。これにより、その動作がデフォルトに再設定されます。

```
$ oc tag <repository/image> <image-name:tag>
```

第6章 イメージ設定リソース

以下の手順でイメージレジストリーを設定します。

6.1. イメージコントローラー設定パラメーター

`image.config.openshift.io/cluster` リソースは以下の設定パラメーターを提供します。

パラメーター	説明
Image	<p>イメージの処理方法についてのクラスター全体の情報を保持します。正規名および唯一の有効な名前となるのは cluster です。</p> <p>spec: 設定についてのユーザーが設定できる値を保持します。 spec サブセクションを編集できます。</p> <p>status: クラスターから監視される値を保持します。</p>
ImageSpec	<p>allowedRegistriesForImport: 標準ユーザーがイメージのインポートに使用するコンテナイメージレジストリーを制限します。この一覧を、有効なイメージを含むものとしてユーザーが信頼し、アプリケーションのインポート元となるレジストリーに設定します。イメージまたは ImageStreamMappings を API 経由で作成するパーミッションを持つユーザーは、このポリシーによる影響を受けません。通常、これらのパーミッションを持っているのはクラスター管理者のみです。</p> <p>additionalTrustedCA: ImageStream import、 pod image pull、 openshift-image-registry pullthrough、およびビルドの処理時に信頼される必要のある追加の CA が含まれる ConfigMap の参照です。</p> <p>この ConfigMap の namespace は openshift-config です。ConfigMap の形式では、信頼する追加のレジストリー CA についてレジストリーのホスト名をキーとして使用し、PEM エンコード証明書を値として使用します。</p> <p>registrySources: コンテナランタイムがビルドおよび Pod のイメージへのアクセス時に個々のレジストリーを処理する方法を決定する設定が含まれます。たとえば、非セキュアなアクセスを許可するかどうかを設定します。内部クラスターレジストリーの設定は含まれません。</p>
ImageStatus	<p>internalRegistryHostname: internalRegistryHostname を制御するイメージレジストリー Operator によって設定されます。これはデフォルトの内部イメージレジストリーのホスト名を設定します。値は hostname[:port] 形式の値である必要があります。後方互換性を確保するために、OPENSIFT_DEFAULT_REGISTRY 環境変数を依然として使用できますが、この設定によってこの環境変数は上書きされます。</p> <p>externalRegistryHostnames: デフォルトの外部イメージレジストリーのホスト名を指定します。外部ホスト名は、イメージレジストリーが外部に公開される場合にのみ設定される必要があります。最初の値は、イメージストリームの publicDockerImageRepository フィールドで使用されます。値は hostname[:port] 形式の値である必要があります。</p>

パラメーター	説明
RegistryLocation	<p>レジストリーのドメイン名で指定されるレジストリーの場所が含まれます。ドメイン名にはワイルドカードが含まれる可能性があります。</p> <p>domainName: レジストリーのドメイン名を指定します。レジストリーが標準以外の (80 または 443) ポートを使用する場合、ポートはドメイン名にも含まれる必要があります。</p> <p>insecure: insecure はレジストリーがセキュアか、または非セキュアであるかを示します。指定がない場合には、デフォルトでレジストリーはセキュアであることが想定されます。</p>
RegistrySources	<p>レジストリー設定を処理する方法についてのクラスター全体の情報を保持します。</p> <p>insecureRegistries: 有効な TLS 証明書を持たないか、または HTTP 接続のみをサポートするレジストリーです。</p> <p>blockedRegistries: イメージのプルおよびプッシュアクションについてブラックリスト化されます。他のすべてのレジストリーは許可されます。</p> <p>allowedRegistries: イメージのプルおよびプッシュアクションについてホワイトリスト化されます。他のすべてのレジストリーはブロックされます。</p> <p>blockedRegistries または allowedRegistries のいずれかのみを設定できます。</p>

6.2. イメージ設定内容の設定

image.config.openshift.io/cluster リソースを編集してイメージレジストリーの設定を行うことができます。Machine Config Operator (MCO) は、レジストリーへの変更について「image.config.openshift.io/cluster」を監視し、変更を検出するとノードを再起動します。

手順

1. **image.config.openshift.io/cluster** カスタムリソースを編集します。

```
$ oc edit image.config.openshift.io/cluster
```

以下は、**image.config.openshift.io/cluster** リソースの例になります。

```
apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Image 1
metadata:
  annotations:
    release.openshift.io/create-only: "true"
  creationTimestamp: "2019-05-17T13:44:26Z"
  generation: 1
  name: cluster
  resourceVersion: "8302"
  selfLink: /apis/config.openshift.io/v1/images/cluster
  uid: e34555da-78a9-11e9-b92b-06d6c7da38dc
```

```
spec:
  allowedRegistriesForImport: ❷
    - domainName: quay.io
      insecure: false
  additionalTrustedCA: ❸
    name: myconfigmap
  registrySources: ❹
    insecureRegistries: ❺
    - insecure.com
    blockedRegistries: ❻
    - untrusted.com
status:
  internalRegistryHostname: image-registry.openshift-image-registry.svc:5000
```

- ❶ **Image:** イメージの処理方法についてのクラスター全体の情報を保持します。正規名および唯一の有効な名前となるのは **cluster** です。
- ❷ **allowedRegistriesForImport:** 標準ユーザーがイメージのインポートに使用するコンテナイメージレジストリーを制限します。この一覧を、有効なイメージを含むものとしてユーザーが信頼し、アプリケーションのインポート元となるレジストリーに設定します。イメージまたは **ImageStreamMappings** を API 経由で作成するパーミッションを持つユーザーは、このポリシーによる影響を受けません。通常、これらのパーミッションを持っているのはクラスター管理者のみです。
- ❸ **additionalTrustedCA: ImageStream import、pod image pull、openshift-image-registry pullthrough、** およびビルドの処理時に信頼される必要のある追加の CA が含まれる ConfigMap の参照です。この ConfigMap の namespace は **openshift-config** です。ConfigMap の形式では、信頼する追加のレジストリー CA についてレジストリーのホスト名をキーとして使用し、base64 エンコード証明書を値として使用します。
- ❹ **registrySources:** コンテナランタイムがビルドおよび Pod のイメージへのアクセス時に個々のレジストリーを処理する方法を決定する設定が含まれます。たとえば、非セキュアなアクセスを許可するかどうかを設定します。内部クラスターレジストリーの設定は含まれません。
- ❺ **insecureRegistries:** 有効な TLS 証明書を持たないか、または HTTP 接続のみをサポートするレジストリーです。
- ❻ **blockedRegistries:** イメージのプルおよびプッシュアクションについてブラックリスト化されます。他のすべてのレジストリーは許可されます。

6.2.1. 非セキュアなレジストリーのインポートとレジストリーのブロック

image.config.openshift.io/cluster カスタムリソース (CR) を編集して、非セキュアなレジストリーを追加するか、レジストリーをブロックできます。OpenShift Container Platform は、この CR への変更をクラスター内のすべてのノードに適用します。

有効な TLS 証明書を持たない、または HTTP 接続のみをサポートするレジストリーなど、非セキュアな外部レジストリーは使用しないでください。

手順

1. **image.config.openshift.io/cluster** カスタムリソースを編集します。

```
$ oc edit image.config.openshift.io/cluster
```

以下は、**image.config.openshift.io/cluster** リソースの例になります。

```
apiVersion: config.openshift.io/v1
kind: Image
metadata:
  annotations:
    release.openshift.io/create-only: "true"
  creationTimestamp: "2019-05-17T13:44:26Z"
  generation: 1
  name: cluster
  resourceVersion: "8302"
  selfLink: /apis/config.openshift.io/v1/images/cluster
  uid: e34555da-78a9-11e9-b92b-06d6c7da38dc
spec:
  allowedRegistriesForImport:
    - domainName: quay.io
      insecure: false
  additionalTrustedCA:
    name: myconfigmap
  registrySources:
    insecureRegistries: ①
    - insecure.com
    blockedRegistries: ②
    - untrusted.com
status:
  internalRegistryHostname: image-registry.openshift-image-registry.svc:5000
```

- ① 非セキュアなレジストリーを指定します。
- ② イメージのプルおよびプッシュアクションについてブラックリストに指定する必要があるレジストリーを指定します。他のすべてのレジストリーは許可されます。

Machine Config Operator (MCO) は、レジストリーへの変更について **image.config.openshift.io/cluster** を監視し、変更を検出するとノードを再起動します。レジストリーへの変更は、各ノードの `/host/etc/containers/registries.conf` ファイルに表示されます。

```
cat /host/etc/containers/registries.conf
[registries]
[registries.search]
registries = ["registry.access.redhat.com", "docker.io"]
[registries.insecure]
registries = ["insecure.com"]
[registries.block]
registries = ["untrusted.com"]
```

第7章 テンプレートの使用

以下のセクションでは、テンプレートの概要と共に、それらを使用し、作成する方法についての概要を説明します。

7.1. テンプレートについて

テンプレートでは、パラメーター化や処理が可能な一連のオブジェクトを記述し、OpenShift Container Platform で作成するためのオブジェクトの一覧を生成します。テンプレートは、サービス、ビルド設定およびデプロイメント設定など、プロジェクト内で作成パーミッションがあるすべてのものを作成するために処理できます。また、テンプレートではラベルのセットを定義して、これをテンプレート内に定義されたすべてのオブジェクトに適用できます。

オブジェクトの一覧は CLI を使用してテンプレートから作成することも、テンプレートがプロジェクトまたはグローバルテンプレートライブラリーにアップロードされている場合、Web コンソールを使用することもできます。

7.2. テンプレートのアップロード

テンプレートを定義する JSON または YAML ファイルがある場合は、この例にあるように、CLI を使用してプロジェクトにテンプレートをアップロードできます。こうすることで、プロジェクトにテンプレートが保存され、対象のプロジェクトに対して適切なアクセス権があるユーザーがこれを繰り返し使用できます。独自のテンプレートの記述については、このトピックで後ほど説明します。

手順

- 現在のプロジェクトのテンプレートライブラリーにテンプレートをアップロードするには、JSON または YAML ファイルを以下のコマンドで渡します。

```
$ oc create -f <filename>
```

- n** オプションを使用してプロジェクト名を指定することで、別のプロジェクトにテンプレートをアップロードできます。

```
$ oc create -f <filename> -n <project>
```

テンプレートは、Web コンソールまたは CLI を使用して選択できるようになりました。

7.3. WEB コンソールを使用したアプリケーションの作成

Web コンソールを使用して、テンプレートからアプリケーションを作成することができます。

手順

- 必要なプロジェクトで **Add to Project** をクリックします。
- プロジェクト内にあるイメージの一覧またはサービスカタログからビルダーイメージを選択します。



注記

以下に示すように、**builder** タグがアノテーションに列挙されるイメージストリームタグのみがこの一覧に表示されます。


```

kind: "ImageStream"
apiVersion: "v1"
metadata:
  name: "ruby"
  creationTimestamp: null
spec:
  dockerImageRepository: "registry.redhat.io/openshift3/ruby-20-rhel7"
  tags:
  -
    name: "2.0"
    annotations:
      description: "Build and run Ruby 2.0 applications"
      iconClass: "icon-ruby"
      tags: "builder,ruby" ❶
      supports: "ruby:2.0,ruby"
      version: "2.0"

```

- ❶ ここに **builder** を含めると、この **ImageStreamTag** がビルダーとして Web コンソールに表示されます。

3. 新規アプリケーション画面で設定を変更し、オブジェクトをアプリケーションをサポートするように設定します。

7.4. CLI を使用してテンプレートからオブジェクトを作成する手順

CLI を使用して、テンプレートを処理し、オブジェクトを作成するために生成された設定を使用できません。

7.4.1. ラベルの追加

ラベルは、Pod などの生成されたオブジェクトを管理し、整理するために使用されます。テンプレートで指定されるラベルは、テンプレートから生成されるすべてのオブジェクトに適用されます。

手順

- コマンドラインからテンプレートにラベルを追加します。

```
$ oc process -f <filename> -l name=otherLabel
```

7.4.2. パラメーターの一覧表示

上書きできるパラメーターの一覧は、テンプレートの **parameters** セクションに表示されます。

手順

1. CLI で以下のコマンドを使用し、使用するファイルを指定して、パラメーターを一覧表示することができます。

```
$ oc process --parameters -f <filename>
```

または、テンプレートがすでにアップロードされている場合には、以下を実行します。

```
$ oc process --parameters -n <project> <template_name>
```

たとえば、デフォルトの **openshift** プロジェクトにあるクイックスタートテンプレートのいずれかに対してパラメーターを一覧表示する場合に、以下のような出力が表示されます。

```
$ oc process --parameters -n openshift rails-postgresql-example
NAME                DESCRIPTION
GENERATOR           VALUE
SOURCE_REPOSITORY_URL  The URL of the repository with your application source
code                https://github.com/sclorg/rails-ex.git
SOURCE_REPOSITORY_REF  Set this to a branch name, tag or other ref of your
repository if you are not using the default branch
CONTEXT_DIR          Set this to the relative path to your project if it is not in the root of
your repository
APPLICATION_DOMAIN     The exposed hostname that will route to the Rails service
rails-postgresql-example.openshiftapps.com
GITHUB_WEBHOOK_SECRET  A secret string used to configure the GitHub webhook
expression           [a-zA-Z0-9]{40}
SECRET_KEY_BASE        Your secret key for verifying the integrity of signed cookies
expression           [a-z0-9]{127}
APPLICATION_USER       The application user that is used within the sample application
to authorize access on pages                openshift
APPLICATION_PASSWORD   The application password that is used within the sample
application to authorize access on pages                secret
DATABASE_SERVICE_NAME  Database service name
postgresql
POSTGRES_USER          database username
expression            user[A-Z0-9]{3}
POSTGRES_PASSWORD      database password
expression            [a-zA-Z0-9]{8}
POSTGRES_DATABASE      database name
root
POSTGRES_MAX_CONNECTIONS  database max connections
10
POSTGRES_SHARED_BUFFERS  database shared buffers
12MB
```

この出力から、テンプレートの処理時に正規表現のようなジェネレーターで生成された複数のパラメーターを特定できます。

7.4.3. オブジェクト一覧の生成

CLI を使用して、標準出力にオブジェクト一覧を返すテンプレートを定義するファイルを処理できます。

手順

1. 標準出力にオブジェクト一覧を返すテンプレートを定義するファイルを処理します。

```
$ oc process -f <filename>
```

または、テンプレートがすでに現在のプロジェクトにアップロードされている場合には以下を実行します。

```
$ oc process <template_name>
```

2. テンプレートを処理し、**oc create** の出力をパイプして、テンプレートからオブジェクトを作成します。

```
$ oc process -f <filename> | oc create -f -
```

または、テンプレートがすでに現在のプロジェクトにアップロードされている場合には以下を実行します。

```
$ oc process <template> | oc create -f -
```

3. 上書きする **<name>=<value>** の各ペアに、**-p** オプションを追加することで、ファイルに定義されたパラメーターの値を上書きできます。パラメーター参照は、テンプレートアイテム内のテキストフィールドに表示される場合があります。たとえば、テンプレートの以下の **POSTGRESQL_USER** および **POSTGRESQL_DATABASE** パラメーターを上書きし、カスタマイズされた環境変数の設定を出力します。

- a. テンプレートからのオブジェクト一覧の作成

```
$ oc process -f my-rails-postgresql \
  -p POSTGRESQL_USER=bob \
  -p POSTGRESQL_DATABASE=mydatabase
```

- b. JSON ファイルは、ファイルにリダイレクトすることも、**oc create** コマンドで処理済みの出力をパイプして、テンプレートをアップロードせずに直接適用することも可能です。

```
$ oc process -f my-rails-postgresql \
  -p POSTGRESQL_USER=bob \
  -p POSTGRESQL_DATABASE=mydatabase \
  | oc create -f -
```

- c. 多数のパラメーターがある場合は、それらをファイルに保存してからそのファイルを **oc process** に渡すことができます。

```
$ cat postgres.env
POSTGRESQL_USER=bob
POSTGRESQL_DATABASE=mydatabase
$ oc process -f my-rails-postgresql --param-file=postgres.env
```

- d. **--param-file** の引数として **"-"** を使用して、標準入力から環境を読み込むこともできます。

```
$ sed s/bob/alice/ postgres.env | oc process -f my-rails-postgresql --param-file=-
```

7.5. アップロードしたテンプレートの変更

すでにプロジェクトにアップロードされているテンプレートを編集できます。

手順

- すでにアップロードされているテンプレートを変更します。

```
$ oc edit template <template>
```

7.6. インスタントアプリおよびクイックスタートテンプレートの使用

OpenShift Container Platform では、デフォルトで、インスタントアプリとクイックスタートテンプレートを複数提供しており、各種言語で簡単に新規アプリの構築を開始できます。Rails (Ruby)、Django (Python)、Node.js、CakePHP (PHP) および Dancer (Perl) 用のテンプレートを利用できます。クラスター管理者は、これらのテンプレートを利用できるようにデフォルトのグローバル `openshift` プロジェクトにこれらのテンプレートを作成している必要があります。

デフォルトで、テンプレートビルドは必要なアプリケーションコードが含まれる GitHub の公開ソースリポジトリを使用して行われます。

手順

1. 以下のように、利用可能なデフォルトのインスタントアプリとクイックスタートテンプレートを一覧表示できます。

```
$ oc get templates -n openshift
```

2. ソースを変更し、アプリケーションの独自のバージョンをビルドするには、以下を実行します。
 - a. テンプレートのデフォルト `SOURCE_REPOSITORY_URL` パラメーターが参照するリポジトリをフォークします。
 - b. テンプレートから作成する場合には、`SOURCE_REPOSITORY_URL` パラメーターの値を上書きします。デフォルト値ではなく、フォークを指定してください。これにより、テンプレートで作成したビルド設定はアプリケーションコードのフォークを参照ようになり、コードを変更し、アプリケーションを自由に再ビルドできます。



注記

一部のインスタントアプリおよびクイックスタートのテンプレートで、データベースのデプロイメント設定を定義します。テンプレートが定義する設定では、データベースコンテンツ用に一時ストレージを使用します。データベース Pod が何らかの理由で再起動されると、データベースの全データが失われてしまうので、これらのテンプレートはデモ目的でのみ使用する必要があります。

7.6.1. クイックスタートのテンプレート

クイックスタートは、OpenShift Container Platform で実行するアプリケーションの基本的なサンプルです。クイックスタートではさまざまな言語やフレームワークを使用でき、サービスのセット、ビルド設定およびデプロイメント設定などで構成されるテンプレートで定義されています。このテンプレートは、必要なイメージやソースリポジトリを参照して、アプリケーションをビルドし、デプロイします。

クイックスタートを確認するには、テンプレートからアプリケーションを作成します。管理者がこれらのテンプレートを OpenShift Container Platform クラスターにすでにインストールしている可能性があります。その場合には、Web コンソールからこれを簡単に選択できます。

クイックスタートは、アプリケーションのソースコードを含むソースリポジトリを参照します。クイックスタートをカスタマイズするには、リポジトリをフォークし、テンプレートからアプリケーションを作成する時に、デフォルトのソースリポジトリ名をフォークしたリポジトリに置き換えま

す。これにより、提供されたサンプルのソースではなく、独自のソースコードを使用してビルドが実行されます。ソースリポジトリでコードを更新し、新しいビルドを起動して、デプロイされたアプリケーションで変更が反映されていることを確認できます。

7.6.1.1. Web フレームワーククイックスタートのテンプレート

以下のクイックスタートテンプレートでは、指定のフレームワークおよび言語の基本アプリケーションを提供します。

- CakePHP: PHP Web フレームワーク (MySQL データベースを含む)
- Dancer: Perl Web フレームワーク (MySQL データベースを含む)
- Django: Python Web フレームワーク (PostgreSQL データベースを含む)
- NodeJS: NodeJS web アプリケーション (MongoDB データベースを含む)
- Rails: Ruby Web フレームワーク (PostgreSQL データベースを含む)

7.7. テンプレートの作成

アプリケーションの全オブジェクトを簡単に再作成するために、新規テンプレートを定義できます。テンプレートでは、作成するオブジェクトと、これらのオブジェクトの作成をガイドするメタデータを定義します。

以下は、単純なテンプレートオブジェクト定義 (YAML) の例です。

```
apiVersion: v1
kind: Template
metadata:
  name: redis-template
  annotations:
    description: "Description"
    iconClass: "icon-redis"
    tags: "database,nosql"
objects:
- apiVersion: v1
  kind: Pod
  metadata:
    name: redis-master
  spec:
    containers:
    - env:
      - name: REDIS_PASSWORD
        value: ${REDIS_PASSWORD}
      image: dockerfile/redis
      name: master
      ports:
      - containerPort: 6379
        protocol: TCP
  parameters:
  - description: Password used for Redis authentication
    from: '[A-Z0-9]{8}'
    generate: expression
```

```
name: REDIS_PASSWORD
labels:
  redis: master
```

7.7.1. テンプレート記述の作成

テンプレートの記述により、テンプレートの内容に関する情報を提供でき、Web コンソールでの検索時に役立ちます。テンプレート名以外のメタデータは任意ですが、使用できると便利です。メタデータには、一般的な説明などの情報以外にタグのセットも含まれます。便利なタグにはテンプレートで使用する言語名などがあります (例: `java`、`php`、`ruby`)。

以下は、テンプレート記述メタデータの例です。

```
kind: Template
apiVersion: v1
metadata:
  name: cakephp-mysql-example ❶
  annotations:
    openshift.io/display-name: "CakePHP MySQL Example (Ephemeral)" ❷
  description: >-
    An example CakePHP application with a MySQL database. For more information
    about using this template, including OpenShift considerations, see
    https://github.com/sclorg/cakephp-ex/blob/master/README.md.

    WARNING: Any data stored will be lost upon pod destruction. Only use this
    template for testing." ❸
  openshift.io/long-description: >-
    This template defines resources needed to develop a CakePHP application,
    including a build configuration, application DeploymentConfig, and
    database DeploymentConfig. The database is stored in
    non-persistent storage, so this configuration should be used for
    experimental purposes only. ❹
  tags: "quickstart,php,cakephp" ❺
  iconClass: icon-php ❻
  openshift.io/provider-display-name: "Red Hat, Inc." ❼
  openshift.io/documentation-url: "https://github.com/sclorg/cakephp-ex" ❽
  openshift.io/support-url: "https://access.redhat.com" ❾
  message: "Your admin credentials are ${ADMIN_USERNAME}:${ADMIN_PASSWORD}" ❿
```

- ❶ テンプレートの一意の名前。
- ❷ ユーザーインターフェースで利用できるように、ユーザーに分かりやすく、簡単な名前。
- ❸ テンプレートの説明。デプロイされる内容、デプロイ前に知っておく必要のある注意点をユーザーが理解できるように詳細を追加します。**README** ファイルなど、追加情報へのリンクも追加できます。パラグラフを作成するには、改行を追加できます。
- ❹ 追加の説明。たとえば、サービスカタログに表示されます。
- ❺ 検索およびグループ化を実行するためにテンプレートに関連付けられるタグ。これを指定されるカタログカテゴリのいずれかに組み込むタグを追加します。コンソールの定数ファイルの **CATALOG_CATEGORIES** で **id** および **categoryAliases** を参照してください。カテゴリはクラスター全体に対してカスタマイズすることもできます。

- 6 Web コンソールでテンプレートと一緒に表示されるアイコン。可能な場合は、既存のロゴアイコンから選択します。また、FontAwesome や PatternFly からアイコンを使用できます。または、
- 7 テンプレートを提供する人または組織の名前
- 8 テンプレートに関する他のドキュメントを参照する URL
- 9 テンプレートに関するサポートを取得できる URL
- 10 テンプレートがインスタンス化された時に表示される説明メッセージ。このフィールドで、新規作成されたリソースの使用方法をユーザーに通知します。生成された認証情報や他のパラメータを出力に追加できるように、メッセージの表示前にパラメータの置換が行われます。ユーザーが従うべき次の手順が記載されたドキュメントへのリンクを追加してください。

7.7.2. テンプレートラベルの作成

テンプレートにはラベルのセットを追加できます。これらのラベルは、テンプレートがインスタンス化される時に作成されるオブジェクトごとに追加します。このようにラベルを定義すると、特定のテンプレートから作成された全オブジェクトの検索、管理が簡単になります。

以下は、テンプレートオブジェクトのラベルの例です。

```
kind: "Template"
apiVersion: "v1"
...
labels:
  template: "cakephp-mysql-example" ❶
  app: "${NAME}" ❷
```

- ❶ このテンプレートから作成する全オブジェクトに適用されるラベル
- ❷ パラメータ化されたラベル。このラベルは、このテンプレートを基に作成された全オブジェクトに適用されます。パラメータは、ラベルキーおよび値の両方で拡張されます。

7.7.3. テンプレートパラメータの作成

パラメータにより、テンプレートがインスタンス化される時に値を生成するか、ユーザーが値を指定できるようになります。パラメータが参照されると、値が置換されます。参照は、オブジェクト一覧フィールドであればどこでも定義できます。これは、無作為にパスワードを作成したり、テンプレートのカスタマイズに必要なユーザー固有の値やホスト名を指定したりできるので便利です。パラメータは、2種類の方法で参照可能です。

- 文字列の値として、テンプレートの文字列フィールドに `${PARAMETER_NAME}` の形式で配置する
- json/yaml の値として、テンプレートのフィールドに `${{PARAMETER_NAME}}` の形式で配置する

`${PARAMETER_NAME}` 構文を使用すると、複数のパラメータ参照を1つのフィールドに統合でき、`"http://${PARAMETER_1}${PARAMETER_2}"` などのように、参照を固定データ内に埋め込むことができます。どちらのパラメータ値も置換されて、引用された文字列が最終的な値になります。

`${{PARAMETER_NAME}}` 構文のみを使用する場合は、単一のパラメータ参照のみが許可され、先頭文字や終了文字は使用できません。結果の値は、置換後に結果が有効な json オブジェクトの場合は引用

されません。結果が有効な json 値でない場合に、結果の値は引用され、標準の文字列として処理されます。

単一のパラメーターは、テンプレート内で複数回参照でき、1つのテンプレート内で両方の置換構文を使用して参照することができます。

デフォルト値を指定でき、ユーザーが別の値を指定していない場合に使用されます。

以下は、明示的な値をデフォルト値として設定する例です。

```
parameters:
  - name: USERNAME
    description: "The user name for Joe"
    value: joe
```

パラメーター値は、パラメーター定義に指定したルールを基に生成することも可能です。以下は、パラメーター値の生成例です。

```
parameters:
  - name: PASSWORD
    description: "The random user password"
    generate: expression
    from: "[a-zA-Z0-9]{12}"
```

上記の例では、処理後に、英字の大文字、小文字、数字すべてを含む 12 文字長のパスワードが無作為に作成されます。

利用可能な構文は、完全な正規表現構文ではありません。ただし、`\w`、`\d`、および `\a` 修飾子を使用できます。

- `[w]{10}` は、10 桁の英字、数字、およびアンダースコアを生成します。これは PCRE 標準に準拠し、`[a-zA-Z0-9_]{10}` に相当します。
- `[d]{10}` は 10 桁の数字を生成します。これは `[0-9]{10}` に相当します。
- `[a]{10}` は 10 桁の英字を生成します。これは `[a-zA-Z]{10}` に相当します。

以下は、パラメーター定義と参照を含む完全なテンプレートの例です。

```
kind: Template
apiVersion: v1
metadata:
  name: my-template
objects:
  - kind: BuildConfig
    apiVersion: v1
    metadata:
      name: cakephp-mysql-example
    annotations:
      description: Defines how to build the application
    spec:
      source:
        type: Git
        git:
          uri: "${SOURCE_REPOSITORY_URL}" 1
```



```

    ref: "${SOURCE_REPOSITORY_REF}"
    contextDir: "${CONTEXT_DIR}"
- kind: DeploymentConfig
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: frontend
  spec:
    replicas: "${REPLICA_COUNT}" ❷
parameters:
- name: SOURCE_REPOSITORY_URL ❸
  displayName: Source Repository URL ❹
  description: The URL of the repository with your application source code ❺
  value: https://github.com/sclorg/cakephp-ex.git ❻
  required: true ❼
- name: GITHUB_WEBHOOK_SECRET
  description: A secret string used to configure the GitHub webhook
  generate: expression ❽
  from: "[a-zA-Z0-9]{40}" ❾
- name: REPLICA_COUNT
  description: Number of replicas to run
  value: "2"
  required: true
message: "... The GitHub webhook secret is ${GITHUB_WEBHOOK_SECRET} ..." ❿

```

- ❶ この値は、テンプレートがインスタンス化された時点で **SOURCE_REPOSITORY_URL** パラメーターに置き換えられます。
- ❷ この値は、テンプレートがインスタンス化された時点で、**REPLICA_COUNT** パラメーターの引用なしの値に置き換えられます。
- ❸ パラメーター名。この値は、テンプレート内でパラメーターを参照するのに使用します。
- ❹ 分かりやすいパラメーターの名前。これは、ユーザーに表示されます。
- ❺ パラメーターの説明。期待値に対する制約など、パラメーターの目的を詳細にわたり説明します。説明には、コンソールのテキスト標準に従い、完結した文章を使用するようにしてください。表示名と同じ内容を使用しないでください。
- ❻ テンプレートをインスタンス化する時に、ユーザーにより値が上書きされない場合に使用されるパラメーターのデフォルト値。パスワードなどのデフォルト値の使用を避けるようにしてください。シークレットと組み合わせた生成パラメーターを使用するようにしてください。
- ❼ このパラメーターが必須であることを示します。つまり、ユーザーは空の値で上書きできません。パラメーターでデフォルト値または生成値が指定されていない場合には、ユーザーは値を指定する必要があります。
- ❽ 値が生成されるパラメーター
- ❾ ジェネレーターへの入力。この場合、ジェネレーターは、大文字、小文字を含む 40 桁の英数字の値を生成します。
- ❿ パラメーターはテンプレートメッセージに含めることができます。これにより、生成された値がユーザーに通知されます。

7.7.4. テンプレートオブジェクト一覧の作成

テンプレートの主な部分は、テンプレートがインスタンス化される時に作成されるオブジェクトの一覧です。これには、**BuildConfig**、**DeploymentConfig**、**Service** など、有効な API オブジェクトを使用できます。オブジェクトはここで定義された通りに作成され、パラメーターの値は作成前に置換されます。これらのオブジェクトの定義では、以前に定義したパラメーターを参照できます。

以下は、オブジェクト一覧の例です。

```
kind: "Template"
apiVersion: "v1"
metadata:
  name: my-template
objects:
- kind: "Service" ①
  apiVersion: "v1"
  metadata:
    name: "cakephp-mysql-example"
    annotations:
      description: "Exposes and load balances the application pods"
  spec:
    ports:
      - name: "web"
        port: 8080
        targetPort: 8080
    selector:
      name: "cakephp-mysql-example"
```

① **Service** の定義。このテンプレートにより作成されます。



注記

オブジェクト定義のメタデータに **namespace** フィールドの固定値が含まれる場合、フィールドはテンプレートのインスタンス化の際に定義から取り除かれます。 **namespace** フィールドにパラメーター参照が含まれる場合には、通常のパラメーター置換が行われ、パラメーターの置換による値の解決が実行された namespace で、オブジェクトが作成されます。この場合、ユーザーは対象の namespace でオブジェクトを作成するパーミッションがあることが前提になります。

7.7.5. テンプレートをバインド可能としてマーキングする

テンプレートサービスブローカーは、認識されているテンプレートオブジェクトごとに、カタログ内にサービスを1つ公開します。デフォルトでは、これらのサービスはそれぞれ「バインド可能」として公開され、エンドユーザーがプロビジョニングしたサービスに対してバインドできるようにします。

手順

テンプレートの作成者は、エンドユーザーが指定テンプレートからプロビジョニングされたサービスに対してバインディングすることを防ぐことができます。

- **template.openshift.io/bindable: "false"** のアノテーションをテンプレートに追加して、エンドユーザーが指定のテンプレートからプロビジョニングされるサービスをバインドできないようにできます。

7.7.6. テンプレートオブジェクトフィールドの公開

テンプレートの作成者は、テンプレートに含まれる特定のオブジェクトのフィールドを公開すべきかどうかを指定できます。テンプレートサービスブローカーは、ConfigMap、Secret、Service、Route オブジェクトに公開されたフィールドを認識し、ユーザーがブローカーでサポートされているサービスをバインドする際に公開されたフィールドの値を返します。

オブジェクトのフィールドを1つまたは複数公開するには、テンプレート内のオブジェクトに、プレフィックスが `template.openshift.io/expose-` または `template.openshift.io/base64-expose-` のアノテーションを追加します。

各アノテーションキーは、`bind` 応答のキーになるように、プレフィックスが削除されてパススルーされます。

各アノテーションの値は Kubernetes JSONPath 式の値であり、バインド時に解決され、`bind` 応答で返される値が含まれるオブジェクトフィールドを指定します。



注記

`Bind` 応答のキー/値のペアは、環境変数として、システムの他の場所で使用できます。そのため、アノテーションキーでプレフィックスを取り除いた値を有効な環境変数名として使用することが推奨されます。先頭に `A-Z`、`a-z` または `_` を指定して、その後に、ゼロか、他の文字 `A-Z`、`a-z`、`0-9` または `_` を指定してください。



注記

バックslashでエスケープしない限り、Kubernetes の JSONPath 実装は表現内のどの場所に使用されていても、`.`、`@` などはメタ文字として解釈します。そのため、たとえば、`my.key` という名前の `ConfigMap` のデータを参照するには、JSONPath 式は `{.data['my\\.key']}` とする必要があります。JSONPath 式が YAML でどのように記述されているかによって、`"{.data['my\\.key']}"` などのように、追加でバックslashが必要になる場合があります。

以下は、公開されるさまざまなオブジェクトのフィールドの例です。

```
kind: Template
apiVersion: v1
metadata:
  name: my-template
objects:
- kind: ConfigMap
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: my-template-config
    annotations:
      template.openshift.io/expose-username: "{.data['my\\.username']}"
  data:
    my.username: foo
- kind: Secret
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: my-template-config-secret
    annotations:
      template.openshift.io/base64-expose-password: "{.data['password']}"
  stringData:
```

```

    password: bar
- kind: Service
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: my-template-service
    annotations:
      template.openshift.io/expose-service_ip_port: "{.spec.clusterIP}:{.spec.ports[?
(.name==\"web\")].port}"
  spec:
    ports:
      - name: "web"
        port: 8080
- kind: Route
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: my-template-route
    annotations:
      template.openshift.io/expose-uri: "http://{.spec.host}{.spec.path}"
  spec:
    path: mypath

```

上記の部分的なテンプレートでの **bind** 操作に対する応答例は以下のようになります。

```

{
  "credentials": {
    "username": "foo",
    "password": "YmFy",
    "service_ip_port": "172.30.12.34:8080",
    "uri": "http://route-test.router.default.svc.cluster.local/mypath"
  }
}

```

手順

- **template.openshift.io/expose-** アノテーションを使用して、値を文字列として返します。これは、任意のバイナリーデータを処理しないものの、便利な方法です。
- バイナリーデータを返す必要がある場合、**template.openshift.io/base64-expose-** アノテーションを使用して、データが返される前にデータを base64 でエンコードします。

7.7.7. テンプレートの準備ができるまで待機する

テンプレートの作成者は、テンプレート内の特定のオブジェクトがサービスカタログ、Template Service Broker または TemplateInstance API によるテンプレートのインスタンス化が完了したとされるまで待機する必要があるかを指定できます。

この機能を使用するには、テンプレート内の

Build、**BuildConfig**、**Deployment**、**DeploymentConfig**、**Job** または **StatefulSet** のオブジェクト 1 つ以上に、次のアノテーションでマークを付けてください。

```
"template.alpha.openshift.io/wait-for-ready": "true"
```

テンプレートのインスタンス化は、アノテーションのマークが付けられたすべてのオブジェクトが準備できたと報告されるまで、完了しません。同様に、アノテーションが付けられたオブジェクトが失敗したと報告されるか、固定タイムアウトである 1 時間以内にテンプレートの準備が整わなかった場合に、

テンプレートのインスタンス化は失敗します。

インスタンス化の目的で、各オブジェクトの種類の準備状態および失敗は以下のように定義されます。

種類	準備状態 (Readiness)	失敗 (Failure)
Build	オブジェクトが Complete (完了) フェーズを報告する	オブジェクトが Canceled (キャンセル)、Error (エラー)、または Failed (失敗) を報告する
BuildConfig	関連付けられた最新のビルドオブジェクトが Complete (完了) フェーズを報告する	関連付けられた最新のビルドオブジェクトが Canceled (キャンセル)、Error (エラー)、または Failed (失敗) を報告する
Deployment	オブジェクトが新しい ReplicaSet やデプロイメントが利用可能であることを報告する (これはオブジェクトに定義された readiness プローブに従います)	オブジェクトで、Progressing (進捗中) の状態が false であると報告される
DeploymentConfig	オブジェクトが新しい ReplicaController やデプロイメントが利用可能であると報告する (これはオブジェクトに定義された readiness プローブに従います)	オブジェクトで、Progressing (進捗中) の状態が false であると報告される
Job	オブジェクトが完了 (completion) を報告する	オブジェクトが1つ以上の失敗が発生したことを報告する
StatefulSet	オブジェクトがすべてのレプリカが準備状態にあることを報告する (これはオブジェクトに定義された readiness プローブに従います)	該当なし

以下は、テンプレートサンプルを一部抜粋したものです。この例では、**wait-for-ready** アノテーションが使用されています。他のサンプルは、OpenShift クイックスタートテンプレートにあります。

```
kind: Template
apiVersion: v1
metadata:
  name: my-template
objects:
- kind: BuildConfig
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: ...
  annotations:
    # wait-for-ready used on BuildConfig ensures that template instantiation
    # will fail immediately if build fails
    template.alpha.openshift.io/wait-for-ready: "true"
  spec:
    ...
- kind: DeploymentConfig
  apiVersion: v1
```

```

metadata:
  name: ...
  annotations:
    template.alpha.openshift.io/wait-for-ready: "true"
spec:
  ...
- kind: Service
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: ...
  spec:
    ...

```

その他の推奨事項

- アプリケーションにスムーズに実行するのに十分なリソースが提供されるようにメモリー、CPU、およびストレージのデフォルトサイズを設定します。
- **latest** タグが複数のメジャーバージョンで使用されている場合には、イメージからこのタグを参照しないようにします。新規イメージがそのタグにプッシュされると、実行中のアプリケーションが破損してしまう可能性があります。
- 適切なテンプレートの場合、テンプレートのデプロイ後に変更する必要なしに、ビルドおよびデプロイが正常に行われます。

7.7.8. 既存オブジェクトからのテンプレートの作成

テンプレートをゼロから作成するのではなく、プロジェクトから既存のオブジェクトを YAML 形式でエクスポートして、パラメーターを追加したり、テンプレート形式としてカスタマイズしたりして、YAML 形式を変更することもできます。

手順

1. オブジェクトを YAML 形式でプロジェクトにエクスポートします。

```
$ oc get -o yaml --export all > <yaml_filename>
```

all ではなく、特定のリソースタイプや複数のリソースを置き換えることも可能です。他の例については、**oc get -h** を実行してください。

以下は、**oc get --export all** に含まれるオブジェクトタイプです。

- BuildConfig
- Build
- DeploymentConfig
- ImageStream
- Pod
- ReplicationController
- Route

- Service

第8章 RUBY ON RAILS の使用

Ruby on Rails は Ruby で記述される Web フレームワークです。本書では、OpenShift Container Platform での Rails 4 の使用について扱います。



警告

チュートリアル全体をチェックして、OpenShift Container Platform でアプリケーションを実行するために必要なすべての手順を概観してください。問題に直面した場合には、チュートリアル全体を振り返り、もう一度問題に対応してください。またチュートリアルは、実行済みの手順を確認し、すべての手順が適切に実行されていることを確認するのに役立ちます。

前提条件

- Ruby および Rails の基本知識
- Ruby 2.0.0+、Rubygems、Bundler のローカルにインストールされたバージョン
- Git の基本知識
- OpenShift Container Platform v4 の実行インスタンス
- OpenShift Container Platform のインスタンスが実行中であり、利用可能であることを確認してください。さらに、**oc** CLI クライアントがインストールされており、コマンドがコマンドシェルからアクセスできることを確認し、メールアドレスおよびパスワードを使用してログインする際にこれを使用できるようにします。

8.1. データベースの設定

Rails アプリケーションはほぼ常にデータベースと併用されます。ローカル開発の場合は、PostgreSQL データベースを使用します。

手順

1. データベースをインストールします。

```
$ sudo yum install -y postgresql postgresql-server postgresql-devel
```

2. データベースを初期化します。

```
$ sudo postgresql-setup initdb
```

このコマンドで **/var/lib/pgsql/data** ディレクトリが作成され、このディレクトリにデータが保存されます。

3. データベースを起動します。

```
$ sudo systemctl start postgresql.service
```


4. データベースが実行されたら、**rails** ユーザーを作成します。

```
$ sudo -u postgres createuser -s rails
```

作成をしたユーザーのパスワードは作成されていない点に留意してください。

8.2. アプリケーションの作成

Rails アプリケーションをゼロからビルドするには、Rails gem を先にインストールする必要があります。その後に、アプリケーションを作成することができます。

手順

1. Rails gem をインストールします。

```
$ gem install rails
Successfully installed rails-4.2.0
1 gem installed
```

2. Rails gem のインストール後に、PostgreSQL をデータベースとして指定して新規アプリケーションを作成します。

```
$ rails new rails-app --database=postgresql
```

3. 新規アプリケーションディレクトリーに切り替えます。

```
$ cd rails-app
```

4. アプリケーションがすでにある場合には **pg** (postgresql) gem が **Gemfile** に配置されていることを確認します。配置されていない場合には、gem を追加して **Gemfile** を編集します。

```
gem 'pg'
```

5. すべての依存関係を含む **Gemfile.lock** を新たに生成します。

```
$ bundle install
```

6. **pg** gem で **postgresql** データベースを使用するほか、**config/database.yml** が **postgresql** アダプターを使用していることを確認する必要があります。**config/database.yml** ファイルの **default** セクションを以下のように更新するようにしてください。

```
default: &default
adapter: postgresql
encoding: unicode
pool: 5
host: localhost
username: rails
password:
```

7. アプリケーションの開発およびテスト用のデータベースを作成します。

```
$ rake db:create
```

これで PostgreSQL サーバーに **development** および **test** データベースが作成されます。

8.2.1. Welcome ページの作成

Rails 4 では静的な **public/index.html** ページが実稼働環境で提供されなくなったので、新たに root ページを作成する必要があります。

Welcome ページをカスタマイズするには、以下の手順を実行する必要があります。

- index アクションで **コントローラー** を作成します。
- **welcome** コントローラー **index** アクションの **ビュー** ページを作成します。
- 作成した **コントローラー** と **ビュー** と共にアプリケーションの root ページを提供する **ルート** を作成します。

Rails には、これらの必要な手順をすべて実行するジェネレーターがあります。

手順

1. Rails ジェネレーターを実行します。

```
$ rails generate controller welcome index
```

すべての必要なファイルが作成されます。

2. 以下のように **config/routes.rb** ファイルの 2 行目を編集します。

```
root 'welcome#index'
```

3. rails server を実行して、ページが利用できることを確認します。

```
$ rails server
```

ブラウザで <http://localhost:3000> に移動してページを表示してください。このページが表示されない場合は、サーバーに出力されるログを確認してデバッグを行ってください。

8.2.2. OpenShift Container Platform のアプリケーションの設定

アプリケーションが OpenShift Container Platform で実行中の PostgreSQL データベースサービスと通信できるようにするには、データベースサービスの作成時に定義する環境変数を使用できるように **config/database.yml** の **default** セクションを編集する必要があります。

手順

- 以下のように事前に定義した変数で、**config/database.yml** の **default** セクションを編集します。

```
<% user = ENV.key?("POSTGRESQL_ADMIN_PASSWORD") ? "root" :
ENV["POSTGRESQL_USER"] %>
<% password = ENV.key?("POSTGRESQL_ADMIN_PASSWORD") ?
ENV["POSTGRESQL_ADMIN_PASSWORD"] : ENV["POSTGRESQL_PASSWORD"] %>
```

```
<% db_service = ENV.fetch("DATABASE_SERVICE_NAME", "").upcase %>

default: &default
  adapter: postgresql
  encoding: unicode
  # For details on connection pooling, see rails configuration guide
  # http://guides.rubyonrails.org/configuring.html#database-pooling
  pool: <%= ENV["POSTGRESQL_MAX_CONNECTIONS"] || 5 %>
  username: <%= user %>
  password: <%= password %>
  host: <%= ENV["#{db_service}_SERVICE_HOST"] %>
  port: <%= ENV["#{db_service}_SERVICE_PORT"] %>
  database: <%= ENV["POSTGRESQL_DATABASE"] %>
```

8.2.3. アプリケーションの Git への保存

通常 OpenShift Container Platform でアプリケーションをビルドする場合、ソースコードを git リポジトリに保存する必要があるため、**git** がない場合にはインストールしてください。

前提条件

- git をインストールします。

手順

1. **ls -l** コマンドを実行して、Rails アプリケーションのディレクトリーで操作を行っていることを確認します。コマンドの出力は以下のようになります。

```
$ ls -l
app
bin
config
config.ru
db
Gemfile
Gemfile.lock
lib
log
public
Rakefile
README.rdoc
test
tmp
vendor
```

2. Rails app ディレクトリーで以下のコマンドを実行して、コードを初期化し、git にコミットします。

```
$ git init
$ git add .
$ git commit -m "initial commit"
```

+ アプリケーションがコミットされたら、これをリモートリポジトリにプッシュする必要があります。新規リポジトリを作成する GitHub アカウントです。

1. お使いの **git** リポジトリを参照するリモートを設定します。

```
$ git remote add origin git@github.com:<namespace/repository-name>.git
```

2. アプリケーションをリモートの git リポジトリにプッシュします。

```
$ git push
```

8.3. アプリケーションの OPENSIFT CONTAINER PLATFORM へのデプロイ

OpenShift Container Platform にアプリケーションをデプロイすることができます。

rails-app プロジェクトの作成後、新規プロジェクトの namespace に自動的に切り替えられます。

OpenShift Container Platform へのアプリケーションのデプロイでは 3 つの手順を実行します。

- OpenShift Container Platform の PostgreSQL イメージからデータベースサービスを作成します。
- データベースサービスと連動する OpenShift Container Platform の Ruby 2.0 ビルダイメージおよび Ruby on Rails ソースコードのフロントエンドサービスを作成します。
- アプリケーションのルートを作成します。

手順

- Ruby on Rails アプリケーションをデプロイするには、アプリケーション用に新規のプロジェクトを作成します。

```
$ oc new-project rails-app --description="My Rails application" --display-name="Rails Application"
```

8.3.1. データベースサービスの作成

Rails アプリケーションには実行中のデータベースサービスが必要です。このサービスには、PostgreSQL データベースイメージを使用します。

データベースサービスを作成するために、**oc new-app** コマンドを使用します。このコマンドには、必要な環境変数を渡す必要があります。この環境変数は、データベースコンテナ内で使用します。これらの環境変数は、ユーザー名、パスワード、およびデータベースの名前を設定するために必要です。これらの環境変数の値を任意の値に変更できます。変数は以下のようになります。

- POSTGRESQL_DATABASE
- POSTGRESQL_USER
- POSTGRESQL_PASSWORD

これらの変数を設定すると、以下を確認できます。

- 指定の名前のデータベースが存在する
- 指定の名前のユーザーが存在する

- ユーザーは指定のパスワードで指定のデータベースにアクセスできる

手順

1. データベースサービスを作成します。

```
$ oc new-app postgresql -e POSTGRESQL_DATABASE=db_name -e
  POSTGRESQL_USER=username -e POSTGRESQL_PASSWORD=password
```

データベース管理者のパスワードを設定するには、直前のコマンドに以下を追加します。

```
-e POSTGRESQL_ADMIN_PASSWORD=admin_pw
```

2. 進行状況を確認します。

```
$ oc get pods --watch
```

8.3.2. フロントエンドサービスの作成

アプリケーションを OpenShift Container Platform にデプロイするには、アプリケーションが置かれるリポジトリを指定する必要があります。

手順

1. フロントエンドサービスを作成し、データベースサービスの作成時に設定されたデータベース関連の環境変数を指定します。

```
$ oc new-app path/to/source/code --name=rails-app -e POSTGRESQL_USER=username -e
  POSTGRESQL_PASSWORD=password -e POSTGRESQL_DATABASE=db_name -e
  DATABASE_SERVICE_NAME=postgresql
```

このコマンドでは、OpenShift Container Platform は指定された環境変数を使用してソースコードの取得、ビルダーのセットアップ、アプリケーションイメージのビルド、新規に作成されたイメージのデプロイを実行します。このアプリケーションには **rails-app** という名前を指定します。

2. **rails-app** DeploymentConfig の JSON ドキュメントを参照して、環境変数が追加されたかどうかを確認できます。

```
$ oc get dc rails-app -o json
```

以下のセクションが表示されるはずです。

```
env": [
  {
    "name": "POSTGRESQL_USER",
    "value": "username"
  },
  {
    "name": "POSTGRESQL_PASSWORD",
    "value": "password"
  },
  {
```

```

    "name": "POSTGRESQL_DATABASE",
    "value": "db_name"
  },
  {
    "name": "DATABASE_SERVICE_NAME",
    "value": "postgresql"
  }
],

```

3. ビルドプロセスを確認します。

```
$ oc logs -f build/rails-app-1
```

4. ビルドが完了すると、OpenShift Container Platform で Pod が実行されていることを確認します。

```
$ oc get pods
```

myapp-<number>-<hash> で始まる行が表示されますが、これは OpenShift Container Platform で実行中のアプリケーションです。

5. データベースの移行スクリプトを実行してデータベースを初期化してからでないと、アプリケーションは機能しません。これを実行する 2 種類の方法があります。

- 実行中のフロントエンドコンテナから手動で実行する
 - **rsh** コマンドでフロントエンドコンテナに `exec` を実行します。

```
$ oc rsh <FRONTEND_POD_ID>
```

- コンテナ内から移行を実行します。

```
$ RAILS_ENV=production bundle exec rake db:migrate
```

development または **test** 環境で Rails アプリケーションを実行する場合には、**RAILS_ENV** の環境変数を指定する必要はありません。

- デプロイメント前のライフサイクルフックをテンプレートに迫する

8.3.3. アプリケーションのルートの作成

アプリケーションのルートを作成するためにサービスを公開できます。

手順

- **www.example.com** などの外部からアクセスできるホスト名を指定してサービスを公開するには、OpenShift Container Platform のルートを使用します。この場合は、以下を入力してフロントエンドサービスを公開する必要があります。

```
$ oc expose service rails-app --hostname=www.example.com
```

**警告**

指定するホスト名がルーターの IP アドレスに解決することを確認します。

第9章 イメージの使用

9.1. イメージの使用の概要

以下のトピックを使用して、OpenShift Container Platform ユーザーに提供されているさまざまな Source-to-Image (S2I)、データベース、その他のコンテナイメージを確認します。

Red Hat の公式コンテナイメージは、registry.redhat.io の Red Hat レジストリーで提供されています。OpenShift Container Platform がサポートする S2I、データベース、Jenkins イメージは、Red Hat Quay レジストリーの **openshift4** リポジトリにあります。たとえば、**quay.io/openshift-release-dev/ocp-v4.0-<address>** は OpenShift Application Platform イメージの名前です。

xPaaS ミドルウェアイメージは、Red Hat レジストリーの適切な製品リポジトリで提供されていますが、サフィックスとして **-openshift** が付いています。たとえば、**registry.redhat.io/jboss-eap-6/eap64-openshift** は JBoss EAP イメージの名前です。

このセクションで説明する Red Hat がサポートするイメージはすべて Red Hat Container Catalog に記載されています。各イメージのすべてのバージョンについて、そのコンテンツや用途の詳細を確認できます。関連するイメージを参照または検索してください。



重要

コンテナイメージの新しいバージョンは、OpenShift Container Platform の以前のバージョンとは互換性がありません。お使いの OpenShift Container Platform のバージョンに基づいて、正しいバージョンのコンテナイメージを確認し、使用するようにしてください。

9.2. JENKINS イメージの設定

OpenShift Container Platform には、Jenkins 実行用のコンテナイメージがあります。このイメージには Jenkins サーバーインスタンスが含まれており、このインスタンスを使用して継続的なテスト、統合、デリバリーの基本フローを設定することができます。

イメージは、[Red Hat Universal Base Images \(UBI\)](https://www.redhat.com/en/technologies/cloud-computing/openshift/containers/images) に基づいています。

OpenShift Container Platform は、Jenkins の **LTS** リリースに従います。OpenShift Container Platform は、Jenkins 2.x を含むイメージを提供します。

OpenShift Container Platform Jenkins イメージは、**quay.io** または **registry.redhat.io** で利用できます。

以下は例になります。

```
$ docker pull registry.redhat.io/openshift4/ose-jenkins:<v4.1.4>
```

これらのイメージを使用するには、これらのレジストリーから直接アクセスするか、これらを OpenShift Container Platform コンテナイメージレジストリーにプッシュできます。さらに、コンテナイメージレジストリーまたは外部の場所に、対象イメージを参照する ImageStream を作成することもできます。その後、OpenShift Container Platform リソースが ImageStream を参照できます。

ただし便宜上、OpenShift Container Platform はコア Jenkins イメージの **openshift** namespace に ImageStreams を提供するほか、OpenShift Container Platform を Jenkins と統合するために提供されるエージェントイメージのサンプルも提供します。

9.2.1. 設定とカスタマイズ

Jenkins 認証は、以下の2つの方法で管理できます。

- OpenShift ログインプラグインが提供する OpenShift Container Platform OAuth 認証
- Jenkins が提供する標準認証。

9.2.1.1. OpenShift Container Platform OAuth 認証

OAuth 認証は、Jenkins UI の **Configure Global Security** パネルでオプションを設定するか、Jenkins デプロイメント設定の **OPENSHIFT_ENABLE_OAUTH** 環境変数を **false** 以外に設定して、有効にします。これにより、OpenShift Container Platform ログインプラグインが有効になり、Pod データから、または OpenShift Container Platform API サーバーと対話して設定情報を取得します。

有効な認証情報は、OpenShift Container Platform アイデンティティプロバイダーが制御します。

Jenkins はブラウザおよびブラウザ以外のアクセスの両方をサポートします。

OpenShift Container Platform **Roles** でユーザーに割り当てられる固有の Jenkins パーミッションが指定されている場合、有効なユーザーは、ログイン時に自動的に Jenkins 認証マトリックスに追加されます。デフォルトで使用される **Roles** は、事前に定義される **admin**、**edit**、および **view** です。ログインプラグインは、Jenkins が実行されている **Project** または namespace のそれらの **Roles** に対して自己 SAR 要求 (self-SAR request) を実行します。

admin ロールを持つユーザーには、従来の Jenkins 管理ユーザーパーミッションがあります。ユーザーのパーミッションは、ロールが **edit**、**view** になるほど少なくなります。

OpenShift Container Platform のデフォルトの **admin**、**edit**、**view** の **Roles**、これらの **Roles** が Jenkins インスタンスに割り当てられている Jenkins パーミッションは設定可能です。

OpenShift Container Platform **Pod** で Jenkins を実行する場合、ログインプラグインは Jenkins が実行されている namespace で **openshift-jenkins-login-plugin-config** という名前の **ConfigMap** を検索します。

このプラグインが検出し、その **ConfigMap** で読み取り可能な場合には、**Role** を Jenkins パーミッションマッピングに定義できます。具体的には以下を実行します。

- ログインプラグインは、**ConfigMap** のキーと値のペアを OpenShift Role マッピングに対する Jenkins パーミッションとして処理します。
- キーは Jenkins パーミッショングループの短い ID と Jenkins パーミッションの短い ID で、この2つはハイフンで区切られています。
- OpenShift Container Platform **Role** に **Overall Jenkins Administer** パーミッションを追加する場合は、キーは **Overall-Administer** である必要があります。
- パーミッショングループおよびパーミッション ID が利用可能であるかどうかを把握するには、Jenkins コンソールのマトリックス認証ページに移動し、グループの ID とグループが提供するテーブルの個々のパーミッションを確認します。
- キーと値ペアの値は、パーミッションが適用される必要がある OpenShift Container Platform **Roles** の一覧で、各ロールはカンマで区切られています。
- **Overall Jenkins Administer** パーミッションをデフォルトの **admin** および **edit Roles** の両方に追加し、作成した新規の jenkins ロールも追加する場合は、キーの **Overall-Administer** の値は **admin,edit,jenkins** になります。



注記

OpenShift Container Platform OAuth が使用されている場合、管理者権限で OpenShift Container Platform Jenkins イメージに事前に設定されている **admin** ユーザーには、これらの権限は割り当てられません。これらのパーミッションを付与するには、OpenShift Container Platform クラスター管理者は OpenShift Container Platform アイデンティティプロバイダーでそのユーザーを明示的に定義し、**admin** ロールをユーザーに割り当てる必要があります。

保存される Jenkins ユーザーのパーミッションは、初回のユーザー作成後に変更できます。OpenShift ログインプラグインは、OpenShift Container Platform API サーバーをポーリングしてパーミッションを取得し、ユーザーごとに Jenkins に保存されているパーミッションを、OpenShift Container Platform から取得したパーミッションに更新します。Jenkins UI を使用して Jenkins ユーザーのパーミッションを更新する場合には、プラグインが次回に OpenShift Container Platform をポーリングするタイミングで、パーミッションの変更が上書きされます。

ポーリングの頻度は **OPENSIFT_PERMISSIONS_POLL_INTERVAL** 環境変数で制御できます。デフォルトのポーリングの間隔は 5 分です。

OAuth 認証を使用して新しい Jenkins サービスを作成するには、テンプレートを使用するのが最も簡単な方法です。

9.2.1.2. Jenkins 認証

テンプレートを使用せず、イメージが直接実行される場合には、デフォルトで Jenkins 認証が使用されます。

Jenkins の初回起動時には、設定、管理ユーザーおよびパスワードが作成されます。デフォルトのユーザー認証情報は、**admin** と **password** です。標準の Jenkins 認証を使用する場合のみ、**JENKINS_PASSWORD** 環境変数を設定してデフォルトのパスワードを設定します。

手順

- 標準の Jenkins 認証を使用する Jenkins アプリケーションを作成します。

```
$ oc new-app -e \
  JENKINS_PASSWORD=<password> \
  openshift4/ose-jenkins
```

9.2.2. Jenkins 環境変数

Jenkins サーバーは、以下の環境変数で設定できます。

変数	定義	値と設定の例
OPENSIFT_ENABLE_OAUTH	Jenkins へのログイン時に OpenShift ログインプラグインが認証を管理するかどうかを決定します。有効にするには、 true に設定します。	デフォルト: false

変数	定義	値と設定の例
JENKINS_PASSWORD	標準の Jenkins 認証を使用する際の admin ユーザーのパスワード。 OPENSIFT_ENABLE_OAUTH が true に設定されている場合には該当しません。	デフォルト: password
JAVA_MAX_HEAP_PARAM 、 CONTAINER_HEAP_PERCENT 、 JENKINS_MAX_HEAP_UPPER_BOUND_MB	これらの値は Jenkins JVM の最大ヒープサイズを制御します。 JAVA_MAX_HEAP_PARAM が設定されている場合は、その値が優先されます。設定されていない場合は、最大ヒープサイズは、コンテナメモリー制限の CONTAINER_HEAP_PERCENT として動的に計算され、オプションで JENKINS_MAX_HEAP_UPPER_BOUND_MB MiB を上限とします。 デフォルトでは Jenkins JVM の最大ヒープサイズは、上限なしでコンテナメモリー制限の 50% に設定されます。	JAVA_MAX_HEAP_PARAM の設定例: -Xmx512m CONTAINER_HEAP_PERCENT のデフォルト: 0.5 (50%) JENKINS_MAX_HEAP_UPPER_BOUND_MB の設定例: 512 MiB
JAVA_INITIAL_HEAP_PARAM 、 CONTAINER_INITIAL_PERCENT	これらの値は Jenkins JVM の初期ヒープサイズを制御します。 JAVA_INITIAL_HEAP_PARAM が設定されている場合は、その値が優先されます。設定されていない場合は、初期ヒープサイズは、動的に計算される最大ヒープサイズの CONTAINER_INITIAL_PERCENT として動的に計算されます。 デフォルトでは、JVM は初期のヒープサイズを設定します。	JAVA_INITIAL_HEAP_PARAM の設定例: -Xmx32m CONTAINER_INITIAL_PERCENT の設定例: 0.1 (10%)
CONTAINER_CORE_LIMIT	設定されている場合には、内部の JVM スレッドのサイジング数に使用するコアの数を整数で指定します。	設定例: 2

変数	定義	値と設定の例
JAVA_TOOL_OPTIONS	このコンテナで実行中のすべての JVM に適用するオプションを指定します。この値の上書きは推奨していません。	デフォルト: - XX:+UnlockExperimentalVM Options - XX:+UseCGroupMemoryLimitForHeap - Dsun.zip.disableMemoryMapping=true
JAVA_GC_OPTS	Jenkins JVM ガーベージコレクションのパラメーターを指定します。この値の上書きは推奨していません。	デフォルト: - XX:+UseParallelGC - XX:MinHeapFreeRatio=5 - XX:MaxHeapFreeRatio=10 - XX:GCTimeRatio=4 - XX:AdaptiveSizePolicyWeight=90
JENKINS_JAVA_OVERRIDES	Jenkins JVM の追加オプションを指定します。これらのオプションは、上記の Java オプションなどその他すべてのオプションに追加され、必要に応じてそれらの値のいずれかを上書きするのに使用できます。追加オプションがある場合には、スペースで区切ります。オプションにスペース文字が含まれる場合には、バックスラッシュでエスケープしてください。	設定例: -Dfoo -Dbar; -Dfoo=first\ value -Dbar=second\ value
JENKINS_OPTS	Jenkins への引数を指定します。	
INSTALL_PLUGINS	コンテナが初めて実行された場合や、 OVERRIDE_PV_PLUGINS_WITH_IMAGE_PLUGINS が true に設定されている場合に、インストールする追加の Jenkins プラグインを指定します。プラグインは、名前:バージョンのペアのカンマ区切りの一覧で指定されません。	設定例: git:3.7.0,subversion:2.10.2
OPENSIFT_PERMISSIONS_POLL_INTERVAL	OpenShift ログインプラグインが Jenkins に定義されているユーザーごとに関連付けられたパーミッションを OpenShift Container Platform でポーリングする間隔をミリ秒単位で指定します。	デフォルト: 300000 - 5 分

変数	定義	値と設定の例
OVERRIDE_PV_CONFIG_WITH_IMAGE_CONFIG	<p>Jenkins 設定ディレクトリー用に OpenShift Container Platform 永続ボリュームを使用してこのイメージを実行する場合、永続ボリュームは Persistent Volume Claim (PVC、永続ボリューム要求) の作成時に割り当てられるため、イメージから永続ボリュームに設定が転送されるのは、イメージの初回起動時のみです。このイメージを拡張し、初回起動後にカスタムイメージの設定を更新するカスタムイメージを作成する場合、この環境変数を true に設定しない限り、設定はコピーされません。</p>	デフォルト: false
OVERRIDE_PV_PLUGINS_WITH_IMAGE_PLUGINS	<p>Jenkins 設定ディレクトリー用に OpenShift Container Platform 永続ボリュームを使用してこのイメージを実行する場合、永続ボリュームは Persistent Volume Claim (PVC、永続ボリューム要求) の作成時に割り当てられるため、イメージから永続ボリュームにプラグインが転送されるのは、イメージの初回起動時のみです。このイメージを拡張し、初回起動後にカスタムイメージのプラグインを更新するカスタムイメージを作成する場合、この環境変数を true に設定しない限り、プラグインはコピーされません。</p>	デフォルト: false
ENABLE_FATAL_ERROR_LOG_FILE	<p>Jenkins 設定ディレクトリー用に OpenShift Container Platform の Persistent Volume Claim (PVC、永続ボリューム要求) を使用してこのイメージを実行する場合に、この環境変数は致命的なエラーが生じる際に致命的なエラーのログファイルが永続することを可能にします。致命的なエラーのファイルは /var/lib/jenkins/logs に保存されます。</p>	デフォルト: false

変数	定義	値と設定の例
NODEJS_SLAVE_IMAGE	この値を設定すると、デフォルトの NodeJS エージェント Pod 設定に使用されるイメージが上書きされます。 jenkins-agent-nodejs という名前の関連イメージストリームタグがプロジェクトにあります。この変数は、有効にするために Jenkins の初回の起動前に設定される必要があります。	Jenkins サーバーのデフォルトの NodeJS エージェントイメージ: image-registry.openshift-image-registry.svc:5000/openshift/jenkins-agent-nodejs:latest
MAVEN_SLAVE_IMAGE	この値を設定すると、デフォルトの maven エージェント Pod 設定に使用されるイメージが上書きされます。 jenkins-agent-maven という名前の関連イメージストリームタグがプロジェクトにあります。この変数は、有効にするために Jenkins の初回の起動前に設定される必要があります。	Jenkins サーバーのデフォルトの Maven エージェントイメージ: image-registry.openshift-image-registry.svc:5000/openshift/jenkins-agent-maven:latest

9.2.3. Jenkins へのプロジェクト間のアクセスの提供

同じプロジェクト以外で Jenkins を実行する場合には、プロジェクトにアクセスするために、Jenkins にアクセストークンを提供する必要があります。

手順

1. サービスアカウントのシークレットを特定します。そのアカウントには、Jenkins がアクセスする必要のあるプロジェクトにアクセスするための適切なパーミッションがあります。

```
$ oc describe serviceaccount jenkins
Name:      default
Labels:   <none>
Secrets:  { jenkins-token-uyswp }
          { jenkins-dockercfg-xcr3d }
Tokens:   jenkins-token-izv1u
          jenkins-token-uyswp
```

ここでは、シークレットの名前は **jenkins-token-uyswp** です。

2. シークレットからトークンを取得します。

```
$ oc describe secret <secret name from above>
Name:      jenkins-token-uyswp
Labels:   <none>
Annotations:  kubernetes.io/service-account.name=jenkins,kubernetes.io/service-account.uid=32f5b661-2a8f-11e5-9528-3c970e3bf0b7
Type:     kubernetes.io/service-account-token
Data
```

```
====
ca.crt: 1066 bytes
token: eyJhbGc..<content cut>...wRA
```

トークンパラメーターには、Jenkins がプロジェクトにアクセスするために必要とするトークンの値が含まれます。

9.2.4. Jenkins のボリューム間のマウントポイント

Jenkins イメージはマウントしたボリュームで実行して、設定用に永続ストレージを有効にできます。

- **/var/lib/jenkins** - これは、Jenkins がジョブ定義などの設定ファイルを保存するデータディレクトリです。

9.2.5. S2I (Source-To-Image) による Jenkins イメージのカスタマイズ

正式な OpenShift Container Platform Jenkins イメージをカスタマイズするには、イメージを Source-To-Image (S2I) ビルダーとしてイメージを使用できます。

S2I を使用して、カスタムの Jenkins ジョブ定義をコピーしたり、プラグインを追加したり、同梱の **config.xml** ファイルを独自のカスタムの設定に置き換えたりできます。

Jenkins イメージに変更を追加するには、以下のディレクトリ構造の Git リポジトリが必要です。

plugins

このディレクトリには、Jenkins にコピーするバイナリーの Jenkins プラグインを含めます。

plugins.txt

このファイルは、以下の構文を使用して、インストールするプラグインを一覧表示します。

```
pluginId:pluginVersion
```

configuration/jobs

このディレクトリには、Jenkins ジョブ定義が含まれます。

configuration/config.xml

このファイルには、カスタムの Jenkins 設定が含まれます。

configuration/ディレクトリのコンテンツは **/var/lib/jenkins/**ディレクトリにコピーされるので、このディレクトリに **credentials.xml** などのファイルをさらに追加することもできます。

以下のビルド設定のサンプルは、OpenShift Container Platform で Jenkins イメージをカスタマイズします。

```
apiVersion: v1
kind: BuildConfig
metadata:
  name: custom-jenkins-build
spec:
  source: 1
    git:
      uri: https://github.com/custom/repository
      type: Git
  strategy: 2
    sourceStrategy:
```

```

from:
  kind: ImageStreamTag
  name: jenkins:2
  namespace: openshift
type: Source
output:
  to:
    kind: ImageStreamTag
    name: custom-jenkins:latest

```

- 1 **source** パラメーターは、上記のレイアウトでソースの Git リポジトリを定義します。
- 2 **strategy** パラメーターは、ビルドのソースイメージとして使用するための元の Jenkins イメージを定義します。
- 3 **output** パラメーターは、結果として生成される、カスタマイズした Jenkins イメージを定義します。これは、公式の Jenkins イメージの代わりに、デプロイメント設定で使用できます。

9.2.6. Jenkins Kubernetes プラグインの設定

OpenShift Container Platform Jenkins イメージには、事前にインストール済みの [Kubernetes プラグイン](#) が含まれ、Kubernetes および OpenShift Container Platform を使用して、Jenkins エージェントを複数のコンテナホストで動的にプロビジョニングできるようにします。

OpenShift Container Platform は、Kubernetes プラグインを使用するために、Jenkins エージェントとして使用するのに適したイメージ (**Base**、**Maven**、および **Node.js** イメージ) を提供します。

Maven および Node.js のエージェントイメージは、Kubernetes プラグイン用の OpenShift Container Platform Jenkins イメージの設定内で、Kubernetes Pod テンプレートイメージとして自動的に設定されます。この設定にはイメージごとのラベルが含まれており、**Restrict where this project can be run** の設定にある Jenkins ジョブのいずれかに適用できます。ラベルが適用されている場合、ジョブはそれぞれのエージェントイメージを実行する OpenShift Container Platform Pod の下で実行されます。

Jenkins イメージは、Kubernetes プラグインの追加のエージェントイメージの自動検出および自動設定を実行します。

OpenShift Container Platform 同期プラグインでは、Jenkins イメージは、Jenkins の起動時に、実行中のプロジェクトまたはプラグインの設定に具体的に一覧表示されているプロジェクト内で以下を検索します。

- ラベル **role** が **jenkins-slave** に設定されているイメージストリーム。
- アノテーション **role** が **jenkins-slave** に設定されているイメージストリームタグ。
- ラベル **role** が **jenkins-slave** に設定されている ConfigMap

適切なラベルが付いたイメージストリーム、または適切なアノテーションが付いたイメージストリームタグが見つかったら、対応する Kubernetes プラグイン設定が生成されるため、イメージストリームから提供されるコンテナイメージを実行する Pod で、Jenkins ジョブを実行するように割り当てることができます。

イメージストリームまたはイメージストリームタグの名前およびイメージ参照が、Kubernetes プラグインの Pod テンプレートにある名前およびイメージフィールドにマッピングされます。Kubernetes プラグインの Pod テンプレートのラベルフィールドは、**slave-label** キーを使用し、イメージストリーム

またはイメージストリームタグのオブジェクトにアノテーションを設定して制御できます。これらを使用しない場合には、名前をラベルとして使用します。



注記

Jenkins コンソールにログインして、Pod テンプレート設定を変更しないでください。Pod テンプレートが作成された後にこれを行い、OpenShift 同期プラグインが ImageStream または ImageStreamTag に関連付けられたイメージが変更されたことを検知した場合、Pod テンプレートを置き換え、これらの設定変更を上書きします。新しい設定を既存の設定とマージすることはできません。

より複雑な設定が必要な場合は、ConfigMap を使用する方法を検討してください。

適切なラベルが指定された ConfigMap が検出される場合は、ConfigMap のキーと値のデータペイロードの値に、Jenkins および Kubernetes プラグインの Pod テンプレートの設定形式に準拠する XML が含まれることが想定されます。イメージストリームまたはイメージストリームタグではなく、ConfigMap を使用する際に注意すべき主な違いとして、Kubernetes プラグインの Pod テンプレートのすべてのパラメーターを制御できる点に留意してください。

jenkins-agent の ConfigMap の例:

```
kind: ConfigMap
apiVersion: v1
metadata:
  name: jenkins-agent
  labels:
    role: jenkins-slave
data:
  template1: |-
    <org.csanchez.jenkins.plugins.kubernetes.PodTemplate>
    <inheritFrom></inheritFrom>
    <name>template1</name>
    <instanceCap>2147483647</instanceCap>
    <idleMinutes>0</idleMinutes>
    <label>template1</label>
    <serviceAccount>jenkins</serviceAccount>
    <nodeSelector></nodeSelector>
    <volumes/>
    <containers>
    <org.csanchez.jenkins.plugins.kubernetes.ContainerTemplate>
    <name>jnlp</name>
    <image>openshift/jenkins-agent-maven-35-centos7:v3.10</image>
    <privileged>>false</privileged>
    <alwaysPullImage>>true</alwaysPullImage>
    <workingDir>/tmp</workingDir>
    <command></command>
    <args>${computer.jnlpMac} ${computer.name}</args>
    <ttyEnabled>>false</ttyEnabled>
    <resourceRequestCpu></resourceRequestCpu>
    <resourceRequestMemory></resourceRequestMemory>
    <resourceLimitCpu></resourceLimitCpu>
    <resourceLimitMemory></resourceLimitMemory>
    <envVars/>
    </org.csanchez.jenkins.plugins.kubernetes.ContainerTemplate>
    </containers>
```

```

<envVars/>
<annotations/>
<imagePullSecrets/>
<nodeProperties/>
</org.csanchez.jenkins.plugins.kubernetes.PodTemplate>

```

注記

Jenkins コンソールにログインして、Pod テンプレートの作成後に Pod テンプレート設定をさらに変更し、OpenShift 同期プラグインが ConfigMap が変更されたことを検知すると、これは Pod テンプレートを置き換え、それらの設定変更を上書きします。新しい設定を既存の設定とマージすることはできません。

Jenkins コンソールにログインして、Pod テンプレート設定を変更しないでください。Pod テンプレートが作成された後にこれを行い、OpenShift 同期プラグインが ImageStream または ImageStreamTag に関連付けられたイメージが変更されたことを検知した場合、Pod テンプレートを置き換え、これらの設定変更を上書きします。新しい設定を既存の設定とマージすることはできません。

より複雑な設定が必要な場合は、ConfigMap を使用する方法を検討してください。

インストールされた後、OpenShift 同期プラグインは **ImageStreams**、**ImageStreamTags**、および **ConfigMaps** に更新がないか、OpenShift Container Platform の API サーバーをモニタリングして、Kubernetes プラグインの設定を調整します。

以下のルールが適用されます。

- **ConfigMap**、**ImageStream**、または **ImageStreamTag** からラベルまたはアノテーションを削除すると、既存の **PodTemplate** が Kubernetes プラグインの設定から削除されます。
- これらのオブジェクトが削除されると、対応する設定が Kubernetes プラグインから削除されます。
- 適切なラベルおよびアノテーションが付いた **ConfigMap**、**ImageStream**、または **ImageStreamTag** オブジェクトを作成するか、初回作成後にラベルを追加すると、Kubernetes プラグイン設定に **PodTemplate** が作成されます。
- **ConfigMap** フォームの **PodTemplate** の場合には、**PodTemplate** の **ConfigMap** データへの変更は、Kubernetes プラグイン設定の **PodTemplate** 設定に適用され、**ConfigMap** に変更を加えてから次に変更を加えるまでの間に、Jenkins UI で加えた **PodTemplate** の変更が上書きされます。

Jenkins エージェントとしてコンテナイメージを使用するには、イメージは、エントリーポイントとしてスレーブエージェントを実行する必要があります。これに関する詳細情報は、公式の [Jenkins ドキュメント](#) を参照してください。

9.2.7. Jenkins パーミッション

ConfigMap で、Pod テンプレート XML の **<serviceAccount>** 要素が結果として作成される Pod に使用される OpenShift Container Platform サービスアカウントである場合、サービスアカウントの認証情報が Pod にマウントされます。パーミッションはサービスアカウントに関連付けられ、OpenShift Container Platform マスターに対するどの操作が Pod から許可されるかについて制御します。

Pod に使用されるサービスアカウントについて以下のシナリオを考慮してください。この Pod は、OpenShift Container Platform Jenkins イメージで実行される Kubernetes プラグインによって起動されます。

OpenShift Container Platform で提供される Jenkins のテンプレートサンプルを使用する場合には、**jenkins** サービスアカウントが、Jenkins が実行するプロジェクトの **edit** ロールで定義され、マスター Jenkins Pod にサービスアカウントがマウントされます。

Jenkins 設定に挿入される 2 つのデフォルトの Maven および NodeJS Pod テンプレートは、Jenkins マスターと同じサービスアカウントを使用するように設定されます。

- イメージストリームまたはイメージストリームタグに必要なラベルまたはアノテーションがあるために OpenShift 同期プラグインで自動的に検出されるすべての Pod テンプレートは、Jenkins マスターのサービスアカウントをサービスアカウントとして使用するよう設定されます。
- Pod テンプレートの定義を Jenkins と Kubernetes プラグインに渡す他の方法として、使用するサービスアカウントを明示的に指定する必要があります。他の方法には、Jenkins コンソール、Kubernetes プラグインで提供される **podTemplate** パイプライン DSL、または Pod テンプレートの XML 設定をデータとする ConfigMap のラベル付けなどが含まれます。
- サービスアカウントの値を指定しない場合には、**default** のサービスアカウントが使用されません。
- 使用するサービスアカウントが何であっても、必要なパーミッション、ロールなどを OpenShift Container Platform 内で定義して、Pod から操作するプロジェクトをすべて操作できるようにする必要があります。

9.2.8. テンプレートからの Jenkins サービスの作成

テンプレートには各種パラメーターフィールドがあり、事前定義されたデフォルト値ですべての環境変数を定義できます。OpenShift Container Platform では、新規の Jenkins サービスを簡単に作成できるようにテンプレートが提供されています。Jenkins テンプレートは、クラスター管理者が、クラスターの初期設定時に、デフォルトの **openshift** プロジェクトに登録する必要があります。

使用可能な 2 つのテンプレートは共にデプロイメント設定とサービスを定義します。テンプレートはストレージストラテジーに応じて異なります。これは、Jenkins コンテンツが Pod の再起動時に永続するかどうかに影響を与えます。



注記

Pod は、別のノードへの移動時や、デプロイメント設定の更新で再デプロイメントがトリガーされた時に再起動される可能性があります。

- **jenkins-ephemeral** は一時ストレージを使用します。Pod が再起動すると、すべてのデータが失われます。このテンプレートは、開発またはテストにのみ役立ちます。
- **jenkins-persistent** は永続ボリュームストアを使用します。データは Pod が再起動されても保持されます。

永続ボリュームストアを使用するには、クラスター管理者は OpenShift Container Platform デプロイメントで永続ボリュームプールを定義する必要があります。

必要なテンプレートを選択したら、テンプレートをインスタンス化して Jenkins を使用できるようにする必要があります。

手順

1. 以下の方法のいずれかを使用して、新しい Jenkins アプリケーションを作成します。

- 永続ボリューム:

```
$ oc new-app jenkins-persistent
```

- または、Pod の再起動で設定が維持されない **emptyDir** タイプボリューム:

```
$ oc new-app jenkins-ephemeral
```

9.2.9. Jenkins Kubernetes プラグインの使用

以下の例では、**openshift-jee-sample** BuildConfig により、Jenkins Maven エージェント Pod が動的にプロビジョニングされます。Pod は Java ソースコードをクローンし、WAR ファイルを作成して、2 番目の BuildConfig (**openshift-jee-sample-docker**) を実行します。2 番目の BuildConfig は、新しい WAR ファイルをコンテナイメージに階層化します。

以下の例は、Jenkins Kubernetes プラグインを使用する BuildConfig です。

```
kind: List
apiVersion: v1
items:
- kind: ImageStream
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: openshift-jee-sample
- kind: BuildConfig
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: openshift-jee-sample-docker
  spec:
    strategy:
      type: Docker
    source:
      type: Docker
      dockerfile: |-
        FROM openshift/wildfly-101-centos7:latest
        COPY ROOT.war /wildfly/standalone/deployments/ROOT.war
        CMD $STI_SCRIPTS_PATH/run
    binary:
      asFile: ROOT.war
    output:
      to:
        kind: ImageStreamTag
        name: openshift-jee-sample:latest
- kind: BuildConfig
  apiVersion: v1
  metadata:
    name: openshift-jee-sample
  spec:
    strategy:
      type: JenkinsPipeline
      jenkinsPipelineStrategy:
```

```
jenkinsfile: |-
  node("maven") {
    sh "git clone https://github.com/openshift/openshift-jee-sample.git ."
    sh "mvn -B -Popenshift package"
    sh "oc start-build -F openshift-jee-sample-docker --from-file=target/ROOT.war"
  }
triggers:
- type: ConfigChange
```

動的に作成された Jenkins エージェント Pod の仕様を上書きすることも可能です。以下は、コンテナメモリーを上書きして、環境変数を指定するように先の例を変更しています。

以下の例は、Jenkins Kubernetes プラグインで、メモリー制限および環境変数を指定する BuildConfig です。

```
kind: BuildConfig
apiVersion: v1
metadata:
  name: openshift-jee-sample
spec:
  strategy:
    type: JenkinsPipeline
    jenkinsPipelineStrategy:
      jenkinsfile: |-
        podTemplate(label: "mypod", ❶
          cloud: "openshift", ❷
          inheritFrom: "maven", ❸
          containers: [
            containerTemplate(name: "jnlp", ❹
              image: "openshift/jenkins-agent-maven-35-centos7:v3.10", ❺
              resourceRequestMemory: "512Mi", ❻
              resourceLimitMemory: "512Mi", ❼
              envVars: [
                envVar(key: "CONTAINER_HEAP_PERCENT", value: "0.25") ❽
              ]
            )
          ]
        ) {
          node("mypod") { ❾
            sh "git clone https://github.com/openshift/openshift-jee-sample.git ."
            sh "mvn -B -Popenshift package"
            sh "oc start-build -F openshift-jee-sample-docker --from-file=target/ROOT.war"
          }
        }
      }
    triggers:
      - type: ConfigChange
```

❶ **mypod** という名前の新しい Pod テンプレートが動的に定義されます。この新しい Pod テンプレート名はノードのスタンザで参照されます。

❷ **cloud** の値は **openshift** に設定する必要があります。

❸ 新しい Pod テンプレートは、既存の Pod テンプレートから設定を継承できます。この場合、OpenShift Container Platform で事前定義された Maven Pod テンプレートから継承されます。

❹

この例では、既存のコンテナの値を上書きし、名前を指定する必要があります。OpenShift Container Platform に含まれる Jenkins エージェントイメージはすべて、コンテナ名として **jnlp**

- 5 再びコンテナイメージ名を指定します。これは既知の問題です。
- 6 **512 Mi** のメモリー要求を指定します。
- 7 **512 Mi** のメモリー制限を指定します。
- 8 環境変数 **CONTAINER_HEAP_PERCENT** に値 **0.25** を指定します。
- 9 ノードスタンプは、定義された Pod テンプレート名を参照します。

デフォルトで、Pod はビルドの完了時に削除されます。この動作は、プラグインを使用して、またはパイプライン Jenkinsfile 内で変更できます。

9.2.10. Jenkins メモリーの要件

提供される Jenkins の一時また永続テンプレートでデプロイする場合にはデフォルトのメモリー制限は **1 Gi** です。

デフォルトで、Jenkins コンテナで実行する他のすべてのプロセスは、合計の **512 MiB** を超えるメモリーを使用することはできません。メモリーがさらに必要になると、コンテナは停止します。そのため、パイプラインが可能な場合に、エージェントコンテナで外部コマンドを実行することを強く推奨されます。

また、**Project** クォータがこれを許可する場合は、Jenkins マスターがメモリーの観点から必要とするものについて、Jenkins ドキュメントの推奨事項を参照してください。この推奨事項では、Jenkins マスターにさらにメモリーを割り当てることを禁止しています。

Jenkins Kubernetes プラグインによって作成されるエージェントコンテナで、メモリー要求および制限の値を指定することが推奨されます。管理者ユーザーは、Jenkins 設定を使用して、エージェントのイメージごとにデフォルト値を設定できます。メモリー要求および制限パラメーターは、コンテナごとに上書きすることもできます。

Jenkins で利用可能なメモリー量を増やすには、Jenkins の一時テンプレートまたは永続テンプレートをインスタンス化する際に **MEMORY_LIMIT** パラメーターを上書きします。

9.2.11. その他のリソース

- [Red Hat Universal Base Images \(UBI\)](#) の詳細は、「[ベースイメージのオプション](#)」を参照してください。

9.3. JENKINS エージェント

OpenShift Container Platform では、Jenkins エージェントとして使用するのに適したイメージを3つのイメージ (**Base**、**Maven**、および **Node.js**) を提供します。

1番目は、Jenkins エージェントのベースイメージです。

- 必須のツール (ヘッドレス Java、Jenkins JNLP クライアント) と有用なツール (**git**、**tar**、**zip**、**nss** など) の両方を取り入れます。
- JNLP エージェントをエン트리ポイントとして確立します。

- Jenkins ジョブ内からコマンドラインの操作を呼び出す **oc** クライアントツールが含まれます。
- Red Hat Enterprise Linux (RHEL) および **localdev** イメージの両方の Dockerfile を提供します。

ベースイメージを拡張するイメージがさらに 2 つ提供されます。

- Maven v3.5 イメージ
- Node.js v8 イメージ

Maven および Node.js Jenkins エージェントイメージは、新しいエージェントイメージをビルドする際に参照できる Universal Base Image (UBI) 用の Dockerfile を提供します。**contrib** および **contrib/bin** サブディレクトリーにも注目してください。このサブディレクトリーでは、イメージの設定ファイルや実行可能なスクリプトの挿入が可能です。



重要

OpenShift Container Platform のバージョンに適したエージェントイメージバージョンを使用し、継承します。エージェントイメージに埋め込まれた **oc** クライアントバージョンが OpenShift Container Platform バージョンと互換性がない場合、予期しない動作が発生する可能性があります。

9.3.1. Jenkins エージェントイメージ

OpenShift Container Platform Jenkins エージェントイメージは **quay.io** または **registry.redhat.io** で利用できます。

Jenkins イメージは、Red Hat レジストリーから入手できます。

```
$ docker pull registry.redhat.io/openshift4/ose-jenkins:<v4.1.4>
$ docker pull registry.redhat.io/openshift4/ose-jenkins-agent-nodejs:<v4.1.4>
$ docker pull registry.redhat.io/openshift4/ose-jenkins-agent-maven:<v4.1.4>
$ docker pull registry.redhat.io/openshift4/ose-jenkins-agent-base:<v4.1.4>
```

これらのイメージを使用するには、**quay.io** または **registry.redhat.io** から直接アクセスするか、これらを OpenShift Container Platform コンテナイメージレジストリーにプッシュします。

9.3.2. Jenkins エージェントの環境変数

各 Jenkins エージェントコンテナは、以下の環境変数で設定できます。

変数	定義	値と設定の例
----	----	--------

変数	定義	値と設定の例
JAVA_MAX_HEAP_PARAM、CONTAINER_HEAP_PERCENT、JENKINS_MAX_HEAP_UPPER_BOUND_MB	<p>これらの値は Jenkins JVM の最大ヒープサイズを制御します。JAVA_MAX_HEAP_PARAM が設定されている場合は、その値が優先されます。設定されていない場合は、最大ヒープサイズは、コンテナメモリー制限の CONTAINER_HEAP_PERCENT として動的に計算され、オプションで JENKINS_MAX_HEAP_UPPER_BOUND_MB MiB を上限とします。</p> <p>デフォルトでは Jenkins JVM の最大ヒープサイズは、上限なしでコンテナメモリー制限の 50% に設定されます。</p>	<p>JAVA_MAX_HEAP_PARAM の設定例: -Xmx512m</p> <p>CONTAINER_HEAP_PERCENT のデフォルト: 0.5 (50%)</p> <p>JENKINS_MAX_HEAP_UPPER_BOUND_MB の設定例: 512 MiB</p>
JAVA_INITIAL_HEAP_PARAM、CONTAINER_INITIAL_PERCENT	<p>これらの値は Jenkins JVM の初期ヒープサイズを制御します。JAVA_INITIAL_HEAP_PARAM が設定されている場合は、その値が優先されます。設定されていない場合は、初期ヒープサイズは、動的に計算される最大ヒープサイズの CONTAINER_INITIAL_PERCENT として動的に計算されます。</p> <p>デフォルトでは、JVM は初期のヒープサイズを設定します。</p>	<p>JAVA_INITIAL_HEAP_PARAM の設定例: -Xmx32m</p> <p>CONTAINER_INITIAL_PERCENT の設定例: 0.1 (10%)</p>
CONTAINER_CORE_LIMIT	<p>設定されている場合には、内部の JVM スレッドのサイジング数に使用するコアの数を整数で指定します。</p>	<p>設定例: 2</p>
JAVA_TOOL_OPTIONS	<p>このコンテナで実行中のすべての JVM に適用するオプションを指定します。この値の上書きは推奨していません。</p>	<p>デフォルト: - XX:+UnlockExperimentalVMOptions - XX:+UseCGroupMemoryLimitForHeap - Dsun.zip.disableMemoryMapping=true</p>

変数	定義	値と設定の例
JAVA_GC_OPTS	Jenkins JVM ガーベージコレクションのパラメーターを指定します。この値の上書きは推奨していません。	デフォルト: - XX:+UseParallelGC - XX:MinHeapFreeRatio=5 - XX:MaxHeapFreeRatio=10 - XX:GCTimeRatio=4 - XX:AdaptiveSizePolicyWeight=90
JENKINS_JAVA_OVERRIDES	Jenkins JVM の追加オプションを指定します。これらのオプションは、上記の Java オプションを含む、その他すべてのオプションに追加され、必要に応じてそれらのいずれかを上書きするために使用できます。追加オプションがある場合には、スペースで区切ります。オプションにスペース文字が含まれる場合には、バックスラッシュでエスケープしてください。	設定例: -Dfoo -Dbar; -Dfoo=first\ value -Dbar=second\ value

9.3.3. Jenkins エージェントのメモリー要件

JVM はすべての Jenkins エージェントで使用され、Jenkins JNLP エージェントをホストし、**javac**、Maven、または Gradle などの Java アプリケーションを実行します。

デフォルトで、Jenkins JNLP エージェントの JVM はヒープにコンテナメモリー制限の 50% を使用します。この値は、**CONTAINER_HEAP_PERCENT** の環境変数で変更可能です。上限を指定することも、すべて上書きすることも可能です。

デフォルトでは、シェルスクリプトや **oc** コマンドをパイプラインから実行するなど、Jenkins エージェントコンテナで実行される他のプロセスはすべて、OOM kill を呼び出さずに残りの 50% メモリー制限を超えるメモリーを使用することはできません。

デフォルトでは、Jenkins エージェントコンテナで実行される他の各 JVM プロセスは、最大でコンテナメモリー制限の 25% をヒープに使用します。多くのビルドワークロードにおいて、この制限の調整が必要になる場合があります。

9.3.4. Jenkins エージェントの Gradle ビルド

OpenShift Container Platform の Jenkins エージェントで Gradle ビルドをホストすると、Jenkins JNLP エージェントおよび Gradle JVM に加え、テストが指定されている場合に Gradle が 3 番目の JVM を起動してテストを実行するので、さらに複雑になります。

以下の設定は、OpenShift Container Platform でメモリーに制約がある Jenkins エージェントの Gradle ビルドを実行する場合の開始点として推奨されます。必要に応じて、これらの設定を変更することができます。

- **gradle.properties** ファイルに **org.gradle.daemon=false** を追加して、有効期間の長い (long-lived) Gradle デーモンを無効にします。

- **gradle.properties** ファイルで **org.gradle.parallel=true** が設定されていないこと、また、コマンドラインの引数として **--parallel** が設定されていないことを確認して、並行ビルドの実行を無効にします。
- **java { options.fork = false }** を **build.gradle** ファイルに設定して、プロセス以外で Java がコンパイルされないようにします。
- **build.gradle** ファイルで **test { maxParallelForks = 1 }** が設定されていることを確認して、複数の追加テストプロセスを無効にします。
- **GRADLE_OPTS**、**JAVA_OPTS**、または **JAVA_TOOL_OPTIONS** 環境変数で、Gradle JVM メモリーパラメーターを上書きします。
- **buile.gradle** の **maxHeapSize** および **jvmArgs** 設定を定義するか、**-Dorg.gradle.jvmargs** コマンドライン引数を使用して、Gradle テスト JVM に最大ヒープサイズと JVM の引数を設定します。

9.3.5. Jenkins エージェント Pod の保持

Jenkins エージェント Pod (別名: スレーブ Pod) は、ビルドが完了するか、または停止された後にデフォルトで削除されます。この動作は、Kubernetes プラグインの **Pod Retention** (Pod の保持) 設定で変更できます。Pod の保持は、すべての Jenkins ビルドについて各 Pod テンプレートの上書きで設定できます。以下の動作がサポートされます。

- **Always** は、ビルドの結果に関係なくビルド Pod を維持します。
- **Default** はプラグイン値を使用します (Pod テンプレートのみ)。
- **Never** は常に Pod を削除します。
- **On Failure** は Pod がビルド時に失敗した場合に Pod を維持します。

Pod の保持はパイプライン Jenkinsfile で上書きできます。

```
podTemplate(label: "mypod",
  cloud: "openshift",
  inheritFrom: "maven",
  podRetention: onFailure(), ❶
  containers: [
    ...
  ]) {
  node("mypod") {
    ...
  }
}
```

- ❶ **podRetention** に許可される値は、**never()**、**onFailure()**、**always()**、および **default()** です。

**警告**

保持される Pod は実行し続け、リソースクォータに対してカウントされる可能性があります。